

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

# 丹保遺跡

——上郷町飯沼丹保地区宅地造成  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1989. 3

長野県飯田市 後藤新三  
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

# 丹 保 遺 跡

——上郷町飯沼丹保地区宅地造成  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1989. 3

長野県飯田市 後藤新三  
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

## 序

昭和62年度に後藤新三さんが、飯沼丹保地区に所有されている土地を宅地造成されるについて、当該地が丹保遺跡にあり、事前に当町埋蔵文化財発掘調査団長今村善興先生や長野県教育委員会文化課の参画を得て、その保護について協議したもので、あらかじめ試掘調査を行い、その結果重要箇所をさらに発掘調査し記録保存することにしました。

この調査は現場発掘調査を昭和62年度前半のうちに終了することができましたが、当町各所の埋蔵文化財の発掘調査が重なるため、整理作業等がおくれ、昭和63年度にこの報告書を著わすに至りました。

この調査の実施にあたっては後藤新三さんの深い御理解と調査費用の大部分を御負担いただくななど、絶大な御協力が得られました。特にこのことは大変有り難いことで、厚く感謝の意を表します。

調査の結果は本書に記録されたとおりですが、今日まで丹保地区においては、これ程の規模に及ぶ調整がなかったこともあって、弥生期を中心とした多くの遺構や遺物の検出は、今後の当町の考古学にとっても重要な資料を提供するもので、大きな貢献になると思います。埋蔵文化財は一度破壊されれば再び甦ることはありませんから記録をしっかりとって後世に伝える義務があると思います。このため、鋭意努力しているところがありますが、土地所有者や開発業者の皆さんとの理解と協力なしには果たせない課題もあります。この意味からも今回調査の意義は非常に大きいものがありました。あらためて後藤さんの誠意を讃えるものです。

末尾ながら、この調査の完了まで献身的に尽力された今村調査団長をはじめ、発掘作業や整理作業に従事いただいた調査補助員、作業員の皆さんに厚く御礼申しあげます。

平成元年3月20日

上郷町教育委員会

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和62年上郷町飯沼丹保1176番地の民間宅地造成工事に伴い、地権者後藤新三と上郷町教育委員会教育長吉川昭文との委託契約に基づく緊急発掘調査の報告書である。
2. 住宅団地とはいへ個人企画の造成工事であるために、調査費は地権者後藤新三氏の協力を得て地権者と上郷町の負担である。
3. 用地の事情・調査期間の限定・雨期にかかる気象条件等により、用地全域の調査が困難で未調査区も残されている。
4. 現地の発掘調査作業指導は、調査團長今村、調査補助員林敏・林貢が担当している。
5. 本書の作成にあたり現地の計測・記録図の作成は林貢・小林の協力をえて今村があたり、土器計測・整図は林貢、石器計測・整図は福田・今村、遺構図の作図・整図は福田・今村眞の協力をえて林貢・今村があたっている。
6. 現地での写真撮影は今村が担当し、遺物の写真撮影は唐木孝治氏に依頼した。
7. 発掘調査終了後年度内は上郷町内の発掘調査が連続し次年度は他町村の発掘調査があつたので、整理作業は昭和63年度事業で実施している。
8. 本書の編集・報文の執筆は今村があたっている。
9. 出土遺物・記録図面は、一括して上郷町歴史民俗資料館に展示・保管されている。

# 目 次

## 序

## 例 言

## 目 次

I. 調査の経過 .....	1
1. 保護協議 .....	1
2. 試掘調査 .....	1
3. 検出調査 .....	2
4. 調査組織 .....	3
(1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会 .....	3
(2) 丹保遺跡発掘調査団 .....	4
II. 丹保遺跡の環境 .....	5
1. 位置と自然的環境 .....	5
2. 歴史的環境（遺跡を中心にして） .....	6
III. 調査の結果 .....	9
1. 遺跡の位置・概要 .....	9
2. 遺構と遺物 .....	9
(1) 主な遺構 .....	9
(2) 主な遺物 .....	9
(3) 1号住居址 .....	9
(4) 3号住居址 .....	13
(5) 2号住居址 .....	13
(6) 4号住居址 .....	14
(7) 5号住居址 .....	15
(8) 6号住居址 .....	15
(9) 7号住居址 .....	18
(10) 8号住居址 .....	18
(11) 9号住居址 .....	18
(12) 祭祀址 .....	18

① 土壌1	② 土壌5	③ 土壌6	
④ 土壌7	⑤ 土壌8	⑥ 土壌9	
⑦ 土壌10			
⑬ その他の土壌			21
⑭ ピット群			21
⑮ 溝状遺構1・2			21
IV. 調査のまとめ			22
1. 丹保遺跡の立地と集落			22
2. 祭祀址の考察			23

## 図 版

1. 国道153号線周辺の遺跡位置図	7
2. 丹保遺跡遺構配置図	10
3. 1・4号住居址	11
4. 2号住居址	12
5. 4号住居址	14
6. 6号住居址	16
7. 3・5・8号住居址、溝址2	17
8. 祭祀址(土壌1・5・6~10)	19
9. 1・4号住居址出土土器	25
10. 1・4・5号住居址出土土器	26
11. 2号住居址出土土器(1)	27
12. 2号住居址出土土器(2)	28
13. 6号住居址出土土器(1)	29
14. 6・5・8号住居址出土土器、柱穴群	30
15. 祭祀址中央~北出土土器	31
16. 祭祀址中央~南出土土器	32
17. 1・4号住居址出土土器拓影	33
18. 2号住居址出土土器拓影	34
19. 3・5・6号住居址出土土器拓影	35
20. 5・8号住居址出土土器拓影	36
21. 祭祀址出土土器拓影	37

22. 1・2号住居址出土石器(1) .....	38
23. 1・2・3号住居址出土石器(2) .....	39
24. 4・5・6号住居址出土石器 .....	40
25. 6・8号住居址、祭祀址等出土石器 .....	41
26. 溝址1・グリット出土石器 .....	42

## 写 真 図 版

1. 発掘調査前の調査地 .....	43
2. 遺構全景 .....	44
3. 1・4号住居址 .....	45
4. 2号住居址 .....	46
5. 2号住居址・祭祀址土器出土状況 .....	47
6. 6号住居址と柱穴群 .....	48
7. 3号住居址と石組土壤 .....	49
8. 祭祀址全景 .....	50
9. 祭祀址祭器出土状況（土壤7・8） .....	51
10. 祭祀址壺形・培形土器出土状況 .....	52
11. 1・4号住居址出土土器 .....	53
12. 2号住居址出土土器 .....	54
13. 3・5・6号住居址出土土器 .....	55
14. 祭祀址出土土器と炭化米 .....	56
15. 出土石器 .....	57
16. 調査団と調査風景 .....	58

## I. 調査の経過

### 1. 保護協議

飯沼丹保1176番地地籍に上郷町農協の斡旋による売却を目的とする宅地造成計画があった。建設予定地は丹保遺跡の登録範囲に該当し周辺からの遺物出土がみられるので、昭和62年1月から上郷町教育委員会は上郷町農協に保護措置を要請していた。3月20日上郷町農協担当者奥村充由氏と上郷町教育委員会吉川係長・今村による現地協議が行なわれ試掘調査の実施が決定された。今回の宅地造成事業は民間の後藤氏の計画によるものでその取り扱いに苦慮していたが、後藤氏の深い理解によって試掘調査の運びになった。

試掘調査は昭和62年4月21日から4月30日まで8日間行なわれたが、弥生時代中期・後期の住居址が6軒以上発見され、ほかにも遺物集中地もあるために本格的な検出調査が必要となった。

5月2日県教委芦部・小林指導主事が来訪し、後藤夫人・上郷町教育委員会教育長等による懇談・調査要請がなされ、5月9日には後藤夫人・上郷町教育委員会教育長・係長等の協議により発掘調査費は原因者負担、報告書作成費は上郷町負担の話が成立した。

### 2. 試掘調査

昭和62年4月21日発掘資材を現地へ運び調査グリットを設定する。グリットは南北方向に基線を決め南からA・B～、東西方向に1・2～と呼称した。4月21日にはほぼ中央の11列M・Q・Uのグリット掘りをはじめ、Uには黒色土の落ち込み・Qでは砂質土中に弥生時代の遺物が多く出土し、Mグリットでも遺物出土が多かった。

4月24日までに12個ほどのグリット調査の結果、西側は傾斜が強く石器・中世の遺物出土はあったが遺構は無かった。南側用地境も土層は深く1m・20cmほどに及び、砂質土・粘質土・砂礫の堆積層があるが遺物出土は少なかった。遺物出土の多いところは中央付近から北・東に多く、弥生時代の住居址・溝の重複が見られる。最初テントを張った東側には溝址の存在が確認されたので溝の検出を済ませ、埋め土をしてテントの再移動をして北東側の調査に重点を置いた。4月30日までに遺構発見部分の拡張調査の結果、暗渠排水路が3条検出され暗渠によって住居址が壊されたところもあるが、7基の住居址・2条の溝・土壤やピットの発見があって、本格的な検出調査が必要な状況となった。住居址は弥生時代中期・後期のものが重複したところがあり、後期の住居址が重複したり土壤列・ピット列もあって複雑な様相を呈していた。4月30日に一先ず試掘調査を終了して、検出調査の協議成立まで待つことになった。

### 3. 検出調査

後藤氏のご理解を得た検出調査の協議がまとまつたので5月13日から検出調査に入る予定であったが、生憎の雨で遺構掘り込み部が冠水し5月15日は吉川さんの排水ポンプを借用して排水作業に追われ午後から1・2号住居址の検出に掛かった。5月16日から1・4・2・6号住居址の検出を始めたが、2号住居址は火災による炭化材の累積があり高壊・壺形土器等の出土も多く、しかも暗渠排水路に住居址は切られそこからの浸水が多く検出に手間取った。6号住居址は壁際の覆土が黄褐色砂礫土で輪郭の識別が難しく土壤があると思われたが住居址の壁が広まり、床面の検出にも手間取った。5月20日までに2・4・6号住居址のプランがはっきりし、2号住居址に切られた土壤群では完形の壺形土器や壺形土器・土器片の集中する特殊遺構の様相が現わってきた。後の祭祀址である。5月21・22日は2・4・5・6号住居址、祭祀址（土壤5・6・7・8・9）の検出を分担で進め、遺物出土量の多い2号住居址を除いて住居址の全容がはっきりしてきた。5号住居址の北と西に住居址があり3・8号住居址になる。

5月23・24日の豪雨により検出中の住居址等は水没しとなり、調査地全体が池のようであった。5月25日は排水ポンプを駆使して水抜きに1日追われ、午後ようやく高い部分のピット検出に入った。しかし北側の水田からの浸水が多いので大型排水ポンプを借り上げ毎朝と日中時々排水作業をしながら検出作業を続けた。

5月26日午後からようやく住居址の検出が進み5月29日頃までに2・4・6号住居址の検出が終了し、祭祀址・5号住居址・溝2の検出が残される状況になった。祭祀址はさらに西に続き3号住居址と重複し、5号住居址は溝・8号住居址と重複して全容を検出することが困難であった。5月30日に住居址・全体測量を進めながら主たる遺物の取り上げ作業をする。午後教育委員会主催の現地見学会が開かれ、地権者後藤新三氏・上郷町文化財調査委員会はじめ80余人の方々が参加され盛会であった。現地見学のあと町の方々と祭祀址の壺形土器・壺形土器の取り上げ作業をする。

6月1日資材の片付け、祭祀址の遺物取り上げ・写真撮影・測量を済ませ、午後上黒田平畑遺跡へ資材運搬をし現地作業を終了する。その後上郷町の調査が連続し昭和63年度は阿南町・下条村の発掘調査に追われていたので、平成元年1月から報告書作成作業を続け3月ようやく原稿作成を終了している。

## 4. 調査組織

### (1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会

#### ① 規約

##### (設置)

第1条 この会は、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」（以下委員会という）と称し、事務局を上郷町教育委員会事務局に置く。

##### (目的)

第2条 この委員会は、上郷町内の関係各機関・団体及び考古学関係者の相互協力により、上郷町埋蔵文化財保護事業の円滑な実施をはかることを目的とする。

##### (事業)

第3条 この委員会は、前条の目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 遺跡調査の総合企画、連絡・調整に関すること。
- (2) 土地所有者の発掘承諾に関すること。
- (3) 発掘調査員及び作業員の確保に関すること。
- (4) そのほか目的達成に必要なこと。

##### (役職員)

第4条 この委員会に次の役職員を置く。

- (1) 顧問 1名、会長 1名、副会長 2名、委員若干名、事務局員若干名
- (2) 顧問は町長とし、そのほかの役員は委員会において互選する。
- (3) 委員は次の通りとする。  
教育委員 5名、文化財保護委員 5名、考古学関係者 3名、産業常任委員長、建設常任委員長、土地改良事業等地元代表者
- (4) 事務局員は関係各局の職員を充てる。

##### (役員の職務)

第5条 会長は委員会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

##### (会議)

第6条 この委員会の会議は、会長の招集により開催する。

##### (そのほか)

第7条 この規約に定めるもののほか、会の運営に必要な事項は委員会において決定する。

#### 付則

1. この規約は、昭和62年4月10日より施行する。

## ② 役職員

顧問	山田 隆士（町長）	
会長	北原 忠夫（教育委員会教育長～62.9）	
	小室 伊作（同 上 62.10～）	
副会長	北原 治人（産業常任委員長～62.4）	
	岩崎 智道（同 上 62.5～）	
	小木曾英寿（文化財保護委員長）	
委員	小室 伊作（教育委員～62.9）	牧野 光彌（文化財保護委員）
	北原 勝（同上）	麦島 正吉（同 上）
	矢崎 和子（同上）	菊本 正義（同 上）
	北原政治郎（同上 62.10～）	稲垣 隆（同 上）
	吉川 昭文（教育委員会教育長）	佐々木啓治（上黒田東部地区）
	平栗 弘（建設常任委員長～62.4）	北原 治作（大明神地区）
	篠木 俊寛（同 上 62.5～）	中島 博男（下黒田中部地区）
	今村 善興（日本考古学協会員）	唐沢 富雄（南条地区）
	佐藤 駿信（同 上）	畠中 尚二（別府下河原地区）
	岡田 正彦（同 上）	堀口 信幸（別府小手抜地区）
事務局員	吉川 昭文（教育委員会教育長）	北原 克司（産業課課長）
	菅沼 富雄（同上 事務局長）	岡田 清平（同上 課長補佐）
	吉川 勝一（同上 局長補佐）	中西 紘（同上 耕地係長）
	山下 誠一（同上 社会教育係）	鈴木 幹夫（同上 主査）
	今村 美和（同 上）	

## ② 丹保遺跡発掘調査団

調査団長	今村 善興（長野県文化財保護指導委員）
調査主任	山下 誠一（教育委員会社会教育係）
調査補助員	林 敏 林 賢
作業協力員	池戸 大八 井坪 芳一 下沢 貞満 原 祐三 吉川 佐一 瀬古 郁保 井上 直樹 大坪 安江 松田 照江 今村 春一 小林 薫 福田 千八 今村 俱栄 福田すえ子 島崎 泰三

## Ⅱ. 丹保遺跡の環境

### 1. 位置と自然環境

丹保遺跡の所在する長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を両側と北側に走行する南・中央両アルプス山脈の谷間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。野底山・鷹巣山が北西にあり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し飯田松川・天龍川に注いでいる。この両河川に挟まれて、東西に細長く続く面積26 km<sup>2</sup>に及ぶ広大な緩傾斜地形の地域である。

北は土曾川によって飯田市座光寺・野底川上流地域では高森町・飯田市松川入に境している。西・南は鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎・旧松尾地籍に接している。この地域は南流する天龍川と、その諸支流によって形成されたいくつもの河岸段丘や広大な扇状地の広がるところであって、とくに上郷町の段丘・扇状地はこの地方でも広いので、原始・古代から現代までの優れた生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那盆地全域に形成されている伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は、中央に広がる下黒田・飯沼境の大段丘を境にして上段と呼ばれる洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、下段と呼ばれる沖積土壌の堆積する低位段丘Ⅱが何段かに構成されている。

低位段丘Ⅱに当たる段丘面は飯沼面・別府面・南条面と呼ばれ、飯田市松尾・高森町下市田地籍とともに下伊那地方の段丘模式地ともなっている。上段伊久間面（黒田面）の大きな段丘崖はやく50mの比高があり、標高420~430 mほどの飯沼面、その下方に410~420 mほどの別府面、さらに下方に400~410 mほどの南条面が帶状に続いている。

飯沼面は立坂崖下の細長く続く低段丘Ⅰの下に接する段丘面で、南は別府地籍中段中島地籍一帯から南条上部を経て飯沼地籍の中央部に広がり、飯田市座光寺・高森町下市田の国道153号線沿いに広がる広範な地域である。上郷町では低位段丘Ⅱの下段に当たる南条面が中間に湾入してそれを取り巻くように別府面・飯沼面が上位に続いている。飯沼面は北ほど広く飯沼地籍の半分くらいが包括され、南側の南条面湾入部分に多い低湿地を控え、北東は土曾川に面する細長い低地に挟まれた微高地の台地であるから、古くから居住地域としての立地条件は恵まれているところである。

飯沼地籍を細かく見ると北側に位置する北条地籍から南側に流れる小河川・井筋が数条あってそれぞれの両側に微高地が並んでいる。北北東側の室垣外・丹保地籍は高めで広い範囲であるが中間に低地を挟んだ帯状の台地が北北西から南南東に伸びている。今回の調査地の丹保地籍は西側に低地を挟んで矢張地籍の台地に相対している。

## 2. 歴史的環境（遺跡を中心にして）

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると、埋蔵文化財包蔵地67・古墳32・中世城跡3の合計104遺跡が確認され登録されている。昭和59年頃から各地の発掘調査が進み、新発見の遺跡もあったり、古社寺跡等も含めれば更にこの数は上回る。

上郷町の遺跡を中心とした歴史的変遷を概観してみると、12000年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ見付かっていない。上郷町最古のものは、上段の姫宮遺跡出土の表裏織文式土器片・柏原A遺跡の石器剥片・栗屋元遺跡の有舌ポイントにより、縄文時代草創期の黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器や織維を含む条痕文及び燃糸文土器が出土している。平成元年1月の町道改良工事に伴う西浦遺跡の発掘調査でこの時期の竪穴式住居址が検出され注目されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など8遺跡があり、今まででは上段の中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯に限られていたが、昭和61年矢崎地籍の町道改修に伴う発掘調査で前期後半の住居址が検出され、下位段丘面での生活地も検証されている。

次の縄文時代中期になると爆発的に遺跡数も増加して、低位段丘南条面下段を除き、町内全域に遺構・遺物の発見が目立っている。中期の遺跡49か所中、日影林・八幡原・栗屋元・大明神原・増田遺跡等は集落址・遺物多量発見地域として注目されている。この後に続く約3000~4000年前の縄文時代後期には遺跡数は減少し、上段を中心に8遺跡に留まっている。昭和61年発掘調査の日影林遺跡のように住居址・土壤群が検出されて、今後の発掘調査に期待される時期でもある。最終末の縄文時代晩期の遺跡は3か所知られていたが、昭和62年の矢崎下河原地区整備事業に伴う発掘調査で、東海系の条痕文土器・東北系の浮線網状文土器片が多量に発見されて注目されている。

次の弥生時代は水稻栽培が生活基盤となる新しい文化で、下伊那地方へは三河・尾張・美濃方面から伝播されたものと推定される。弥生時代前期の遺物は極少ないが、中期になると遺跡数は増大する。下段の低湿地周辺に集落の形成が推定されていたが、確証を得るまでには至っていないかった。昭和60・61年、南条下田園地区基盤整備事業に伴う発掘調査で県下最初の弥生時代中期後期の水田址が検証され脚光を浴びている。今回の飯沼丹保遺跡では住居址が2軒検出され、上郷町でもこの時期の遺構発見が続いている。この時期の遺跡の大半は下段の飯沼・南条・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅰ地帯にみられる低湿地帯を利用する水稻耕作の展開が頗る推されている。約1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天龍川氾濫原際に至る広範囲に44か所以上あり、高燥段丘上でも畑作・稻作が行なわれたものと思われる。その代表的なものは住居址43軒を検出した高松原遺跡であり、方形周溝墓11基と住居址23軒を検出した垣外遺跡・大量の土器群の充満した住居址を含め、集落の一部を検出した矢崎地区兼田遺跡・住居址5軒と祭祀的な土器群をもつ土壤列の検出を見た今回の飯沼丹保遺跡等である。丹保遺跡では住



第1図 国道153号線周辺遺跡図 (●発掘調査地, E ●丹保遺跡)

居址検出例は少ないが耕作中に発見された弥生時代後期の完形土器出土地は各所にあり、表面調査による遺物出土地も多いので土地条件からみて濃密な遺跡と考えられる。

古墳時代の遺跡は集落址と墓域とに区別される。上郷町の古墳は煙誠古墳を含めて32基、その大部分は別府地籍の松川に面する台地端に立地し、一部が飯沼段丘崖下にある。いずれも後期古墳で、天神塚・番神塚両前方後円墳以外は円墳である。この頃の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段では明確なものがなく、下段の経済的基盤の豊かな地域で発見されている。遺跡数が多い割に集落址の発見例が少なく、古墳時代前期・後期の土師器を多量出土した南条の轟越遺跡・飯沼北の的場遺跡・飯沼堂垣外遺跡・別府の兼田遺跡に留まっている。遺物多量出土地籍は飯沼・南条・別府各地籍に多いので今後は発見例が続くものと思われる。飯沼地籍は古墳のあるところは低位段丘Ⅰの段丘崖下であって堂垣外・丹保地籍にはない。土曾川を越えた飯田市座光寺地籍でも同様で、代表的な居住地・生産地域かと推測される。

奈良・平安時代の遺物は町内全域で収拾できる。奈良時代・平安時代の選別は容易ではないが平安時代の遺構・遺物は野底山山中から下段の天龍川氾濫原際の最下位段丘まで存在が予想される。生産域の水田地まで含めれば濃淡の差はあるが町内全域に広がっている。下段地帯の松川左岸、築沢川・土曾川右岸に所在する中島・化石・高屋・丹保・堂垣外遺跡等では多量の須恵器片が発見される。昭和62年に発掘調査した矢崎遺跡（下河原地区）は100軒以上と推測される平安時代の大集落地で、大規模な鍛冶遺構が検出され、フイゴ羽口や鉄鋤等の多量出土により上郷町の重要な遺跡のひとつとなっている。近年実施された隣接地飯田市座光寺の詳細分布調査により、土曾川左岸地域では川に接する低地から、最低位段丘先端まで全域にわたって奈良・平安時代の遺物が採集されているが、この例は上郷町でも同様である。

この低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡家所在が有力視される飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘上にあって、上郷町でも遺物出土状況は大差なく濃密なところである。しかも古代条里制構造の存在が地割や地名からも推測され、豊かな湧水・地下水に恵まれ生産域と居住域とが交互に立地する地帯で、古代史探求上きわめて重要な地域のひとつである。標高410~415m辺りは小段丘先端部が南北に連なるところで、奈良時代に都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地のひとつとして注目されている。

この地方は『倭名抄』・『伊呂波字類抄』等のに所載される古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家領の郡戸庄の中にある。善光寺縁起（金沢文庫本）伝承の宇沼村を彷彿させる低湿地の多いところで、史実・伝承のどのひとつをとっても考古学調査上解明に備する地域である。低湿地ひとつをとってもその所在地籍・範囲・それぞれの実態・生活上の活用・居住地との繋り等々未解明のものばかりである。飯沼面・別府面の広く広がる飯沼・別府の台地の間に深く滴入する南条の低湿地やそれに類する低地と、隣接地する台地面の相関関係は殆ど解明されていない。今回の調査地は丹保遺跡の南端に当たり西側の帶状の低地に面するところで、集落地の西側に低地方向とはば同方向に並ぶ祭器群の列が検出されているのも偶然ではないように思われる。

### III. 調査の結果

#### 1. 遺跡の位置・概要

丹保遺跡は飯沼地籍の中央部やや北に位置し、低位段丘Ⅱa<sub>3</sub>・飯沼面の北側中央にある広い台地である。今回の調査地は丹保遺跡の南端、西側に細長く続く低地に面する台地端にある。この周辺から北側一帯では耕作中に発見された弥生時代後期の臺・變形土器出土地が何か所かあり古墳時代・奈良・平安時代・中世の遺物出土が多いところではあるが、今まで発掘調査の例がなく丹保遺跡では最初の発掘調査であった。

当初は弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の遺構重複も予想されたが、弥生時代中期・後期の遺構重複に留まりそれ以降の遺構は近代の暗渠排水路を除けば皆無であった。出土遺物も弥生時代のものが大部分で90%以上を占めている。

#### 2. 遺構と遺物

##### (1) 主な遺構

弥生時代中期住居址2、弥生時代後期住居址（座光寺原・中島式）8、弥生時代後期祭祀址（祭器群列）1、弥生時代柱穴群1、弥生時代土壙3、時期不詳（弥生時代？）溝址2、近代暗渠排水路3。

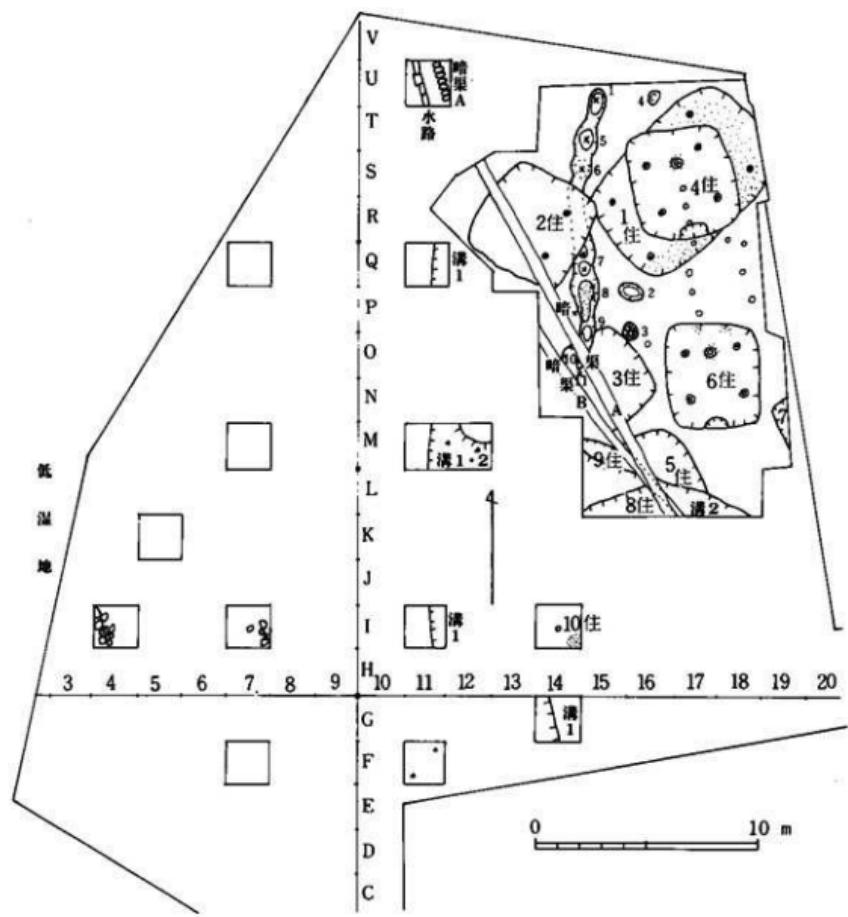
##### (2) 主な遺物

弥生時代中期臺・變形土器・磨製石器・磨製石鏽。弥生時代後期臺・變形土器・高坏形土器打製・磨製石器・磨製石鏽、炭化米。平安時代土器・灰釉陶器片・中世陶器片。

##### (3) 1号住居址

###### ① 遺構（図2・3、写図2・3）

調査地東北隅で検出された住居址で中央部は4号住居址に切られている。東隅が用地外のために完掘されていないが長径8.2m・短径5.6mの不整長方形の竪穴式住居址で、炉が破壊されているのではっきりしないが長径の方向はN 47° Eである。残された壁は浅く床面との比高は5~6cmで火災のためか全面に焼土が多く床も焼け固まっている。炉は4号住居址により破壊されているので位置不詳である。南側に位置する柱穴群のピットも重複しているので主柱穴の位置が画



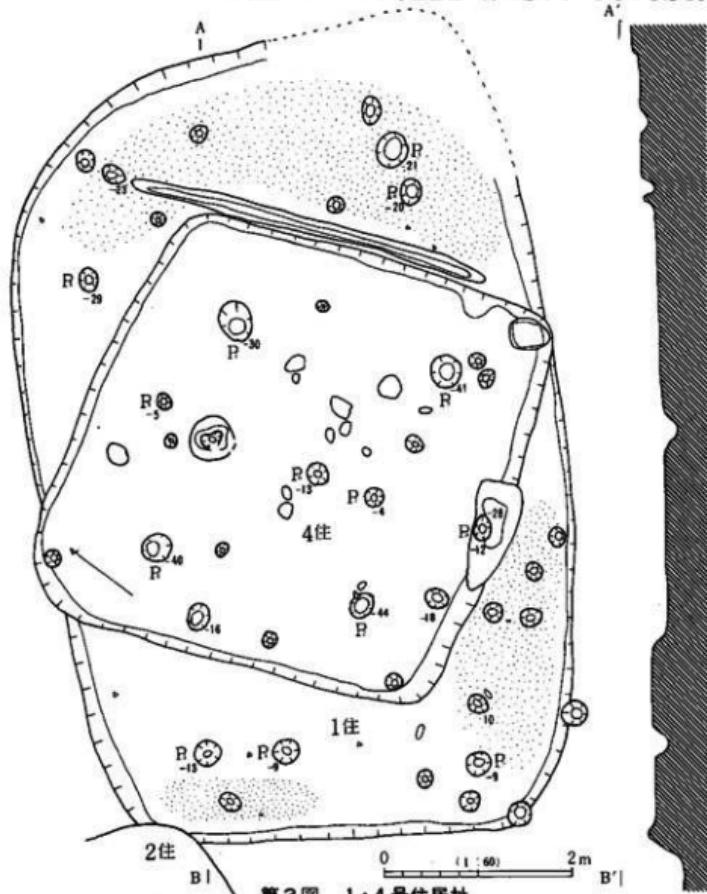
第2図 丹保遺跡遺構配置図

然とはしないが  $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$  かと思われる。それぞれ深さ  $29 \cdot 21 \cdot 13 \cdot 9$  cm と浅く西側  $P_1 \cdot P_2$  がとくに深い。壁の掘り込みも緩やかで西は狭く東は広い不整形のプランである。

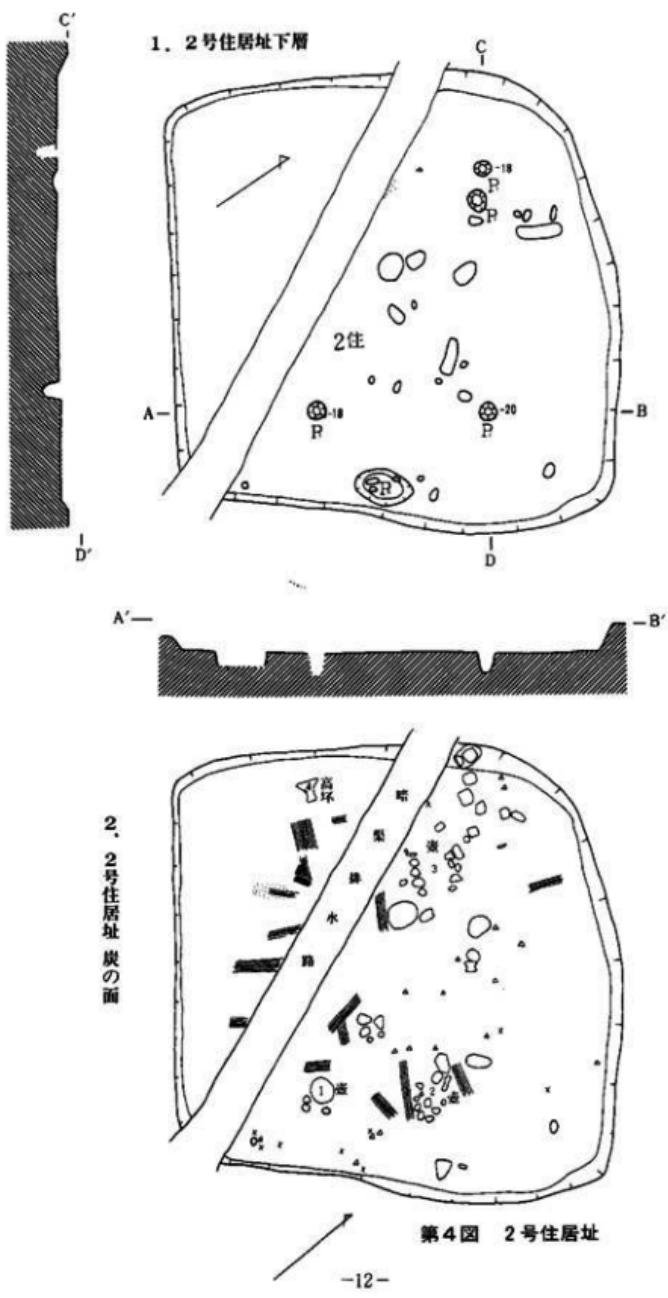
② 遺物 (図 9・10・17・22・23、写図 11・15)

4号住居址と重複しているために単独のものは少ない。9図1は壺形土器の頸部で並行波線並行短線の櫛型文が付く。ほかは壺形土器口縁・壺形壺形土器の底部・台付壺形土器の台等で、図17の押引文の付く口縁・並行沈線と三角区画文のつく土器片 (1・3・4)・浅い条痕文のつく土器片から弥生時代中期恒川式土器かと思われる。

石器は打製鉤形・有肩扁状形石器、磨製石器がある。図22の10~12は精製された磨製石斧である。打製の石錐も出土している。土器のなかには4号住居址に紛れ込んでいるものもある。



第3図 1・4号住居址



#### (4) 3号住居址

##### ① 造構と造物（図3・7・19・23、写図7・11・15）

1号住居址の南、6号住居址の西で検出された竪穴式住居址である。祭祀祀の土壤10・11と2条の暗渠排水路に切られていたので、検出が十分出来なかつたものである。最後に確認したプランは長径3.8m・短径3.0mほどと推定される小振りな住居址で、焼土はあったが炉は確認されずピットはいくつかあったが柱穴の確認はできなかつた。

遺物も少なく土器片は図19の1～16でボタン状突起の付く口縁[1]・貝田町系の土器片（3・4）東海系の壺口縁[0]・細い条痕文のつく土器片から弥生時代中期と考えられる。石器は石包丁類似の横刃形石器と磨製石鎌（図23の21）が出土している。

#### (5) 2号住居址

##### ① 造構（図2・4、写図4・5）

1号住居址の西侧にあって、1号住居址の北隅を切り祭祀祀の土壤列の一部を切って構築された竪穴式住居址である。住居址の西側は南北方向の暗渠排水路で切られこの周辺では掘り方が深いので冠水を受けやすく、住居火災による炭化材の堆積・出土土器多量のために検出に時間を掛けたが、床面まで詳細調査ができないまま調査を諦めた住居址でもある。

プランは4.6×4.5mの隅丸方形に近い形態であるが、西南は度々の冠水で自信が持ち兼ね、東北は祭祀祀との重複で壁の識別が難しく原形を復し難い点がある。炭と焼土は床面の10～15cm上部に堆積し南・西ほどその量が多かった。炭の面から土器片・石器の出土が多く図4の2小文字1～4のところで完形または半完形の土器が出土している。床は冠水の影響もあるがこの時期としてはやや軟弱ぎみで、床面が完全に追い切れていない。柱穴と思われるものは4個検出されているが、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が主柱穴でもう一個は見つかっていない。炉も確認されていないが北西側の暗渠排水路際にわずかに焼土があり、東壁際に大きめのピットがあつたので北北西側にあったと推測される。

##### ② 遺物（図11・12・18・22・23、写図12・15）

図11の土器は一括出土の壺・壺形土器完・半完形で壺形土器の口辺の形態・頸部の波状文の特長、壺形土器の口縁・無文の状況等から弥生時代後期中島式のものである。図12の土器は全部2号住居址のもので1・2は壺形、3・4は壺形、5は壺形、6は台付壺、7・8は高壺形土器で9～25は壺・壺形土器の底部である。高壺形土器は形態・整形法は古墳時代のものに類似しているが出土状態からみればこの住居址のものである。図12・18の土器片の中には弥生時代中期・後期前半のものも混入してはいるが、総じて後期後半中島式のものである。

石器の出土量も多い。図22の16・17、図23の1・2は鍔形、3～6は有肩扁状形石器、8～14は石包丁形石器のいろいろである。8は磨製石包丁、9はえぐりのある打製石包丁、10～12は中

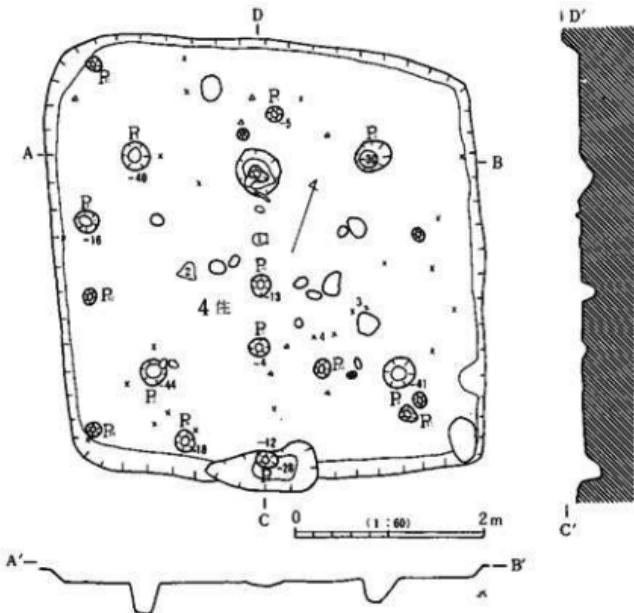
期的な打製石包丁形石器である。15~17は横刃形石器である。

#### (6) 4号住居址

##### ① 造構 (図2・3・5、写図2・3)

調査地東北隅1号住居址と重複した住居址である。一辺4.5mの不整形隅丸方形の竪穴式住居址で主軸方向はN 23°Wである。掘り方は約30cmで壁は傾斜し、床面は凹凸はあるが固く締まつた良好なものである。炉は北側に偏って構築され掘り窪めた楕円形の穴のなかに、壺形土器の肩部から口縁部(図9の4)が逆位に埋められていた。

ピットの数も18個ありP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴である。口径は大きめで深さはそれぞれ46~44~41~30cmを測る。P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>は5~13~7~12cmと浅く間仕切りの穴と思われる。他の穴は1号住居址のもの南の柱穴群のものもありそうで用途は不詳である。南側壁添いに深さ28cmの楕円形の穴がある。この時期によくみられる入口部のピットであろう。土器・石器の出土量は多く完形品も小文字1~4の位置にあり、平状の石も床面密着または上面にあった。



第5図 4号住居址

## ② 遺物（図9・10・17・24、写図11・15）

遺物出土量は多い。図9の4は炉の埋め壺、5～7は變形土器で5は細かい波状文が付くが6・7は無文でハケ・ヘラ調整痕が残る。口縁の形態はそれぞれ異なるが7は後期後葉の形態である。3は器台、9は台付壺の台かと思う。1・2・10は中期の變形土器で1号住居址のものが混入しているものと思われる。図10の10～18は變形土器口縁と底部である。

図17の21～41の土器片のなかには後期座光寺原・中島式のものがみられる。柱穴群等の土器が混入しているとすれば主体となる土器は弥生時代後期座光寺原式であろう。

石器は10数点出土している。図24の1・2は有肩扁状形石器、3～8は石包丁形石器で8は1穴の磨製石包丁、9は磨石である。

## (7) 5号住居址

### ① 遺構（図2・7、写図2）

調査地南側で溝・8・9号住居址と重複していたもので、しかも2本の暗渠排水路によって切られたり調査期間の関係で南側が未調査で終っているために全容が掴めていない。

北側と東側の落ち込みだけは確認できたが覆土は砂礫等も含まれ識別が難しい上に、調査地排水のために貯水した所でもあって遺構が破壊されてしまった。8・9号住居址との切りあい関係も掴めていない。ただ一つ分かることは東側も壁上の長さが5.3m以上であることだけである。

### ② 遺物（図10・20・24、写図13・15）

茶褐色砂礫土中から多くの土器片・石器が出土している。器形の知れるものは少ないが図10の19・20は變形土器・壺形土器の口縁でともに弥生時代後期中島式である。21・22は高環形土器の环部口縁、23・24は高環形土器の脚部である。図20の土器片は8号住居址のものも含まれているが、大部分は5号住居址のものである。壺形・變形・高環形土器片で大部分は中島式土器である。

図24の10～20の石器は10・11は鍔形石器、12は有肩扁状形石器、13～16・19・20は石包丁形石器、17は石製紡錘車破片、18は磨製石器の破片である。

## (8) 6号住居址

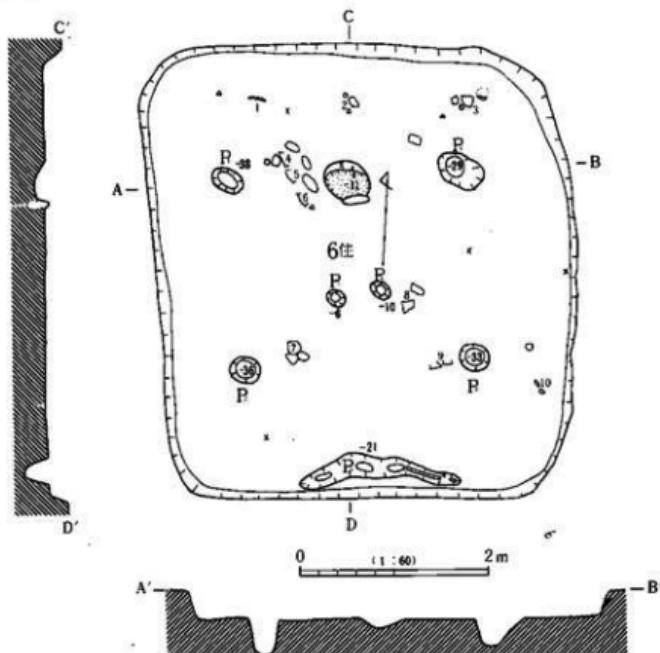
### ① 遺構（図2・6、写図2・6）

1・4号住居址の南柱穴群を挟んで検出された住居址である。南北4.75・東西4.4mのやや不整隔丸長方形の竪穴式住居址で、主軸方向はN6°Wである。壁の高さは30～35cmで掘り込み傾斜は少ない。北側の東・東側の壁が不整であるのは覆土が砂礫混じりのところがあり、土壤状に落ち込むところがあって凹凸ができた。床面も砂礫混じりのところがあり識別が困難であったので遺物出土面を基準にしている。炉は北側に偏って構築された枕石をもつ地床炉で、掘り込みのなかには炭・焼土が充満している。ピットは6個有りP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴で口径は大きく深さは

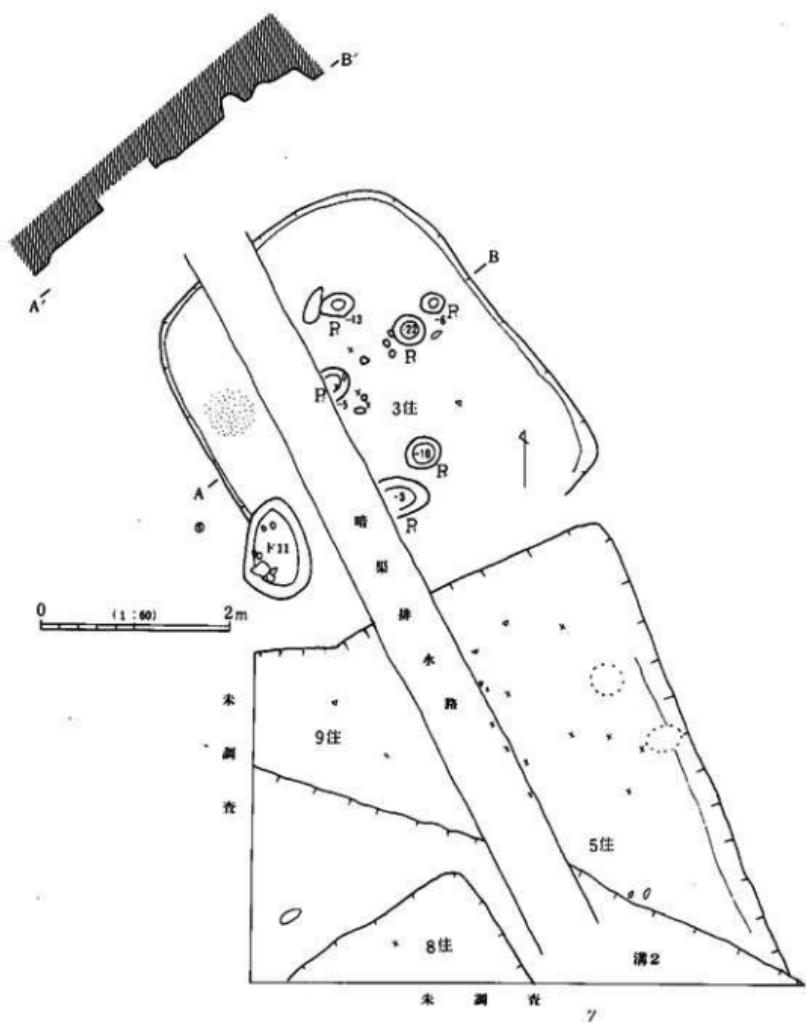
それぞれ38・36・33・29cmを測る。中央付近に浅いピットが2個あり並列するが用途不詳である。南側壁深いに帯状の深さ25cmほどの落ち込みがある。入口部のピットかもしれない。遺物出土は非常に多く小文字1~10はその出土地を示している。図に示されていないところからも高环形・變形土器、磨製石錐・打石器が出土している。

#### ② 遺物（図13・14・19・24・25、写図13・15）

図13の1~3は口辺に細かい波状文を施し頸部に円弧文・斜走短線をもつ臺形口縁、4~10は變形土器で頸部に波状文をもつものは一つ、他は斜走短線文で胎土は柔らかく摩滅ぎみであるがハケ調整痕の残るものもある。11は東側壁上から出土した台付變形土器で口辺部に斜走短線文の付くものである。図14の1~4は壺・變形土器の底部である。図19の17~43の土器片は6号住居址のもので並行沈線・斜走短線・ハケ目が表または表裏に付くもの・無文のもの等がある。41は朱彩の施された變形土器片で胎土は阿島式土器・東海の土器に類似する。6号住居址の土器は器形・口縁の文様・土器の胎土等から本遺跡住居址のなかでは典型的な弥生時代後期座光寺原式の土器である。



第6図 6号住居址



第7図 3・5・8号住居址、溝址2

石器は図24・25に載録してあるが図24の21～23・図25の1は有肩扁状形石器、5・6は磨製石鎌の未完製品、4はえぐりをもつ打製石包丁である。

#### (9) 7号住居址

##### 遺構と遺物(図2)

6号住居址の東用地外に大部分が掛かる住居址ではんの一部しか検出されていない。遺物も数片の土器片だけで弥生時代後期ということは分かるが詳細不詳である。

#### (10) 8号住居址

##### ① 遺構(図2・7)

調査区の南側で溝2に切られた住居址である。住居址の落ち込みも溝によりはっきりしないがごく一部が残されていたものである。東側のコーナーがようやく検出された。

##### ② 遺物(図20・25)

5号住居址と遺物が混入したためにはっきりしないが総体的に中島式土器であるために5号住居址とともに中島式かと思われる。

#### (11) 9号住居址

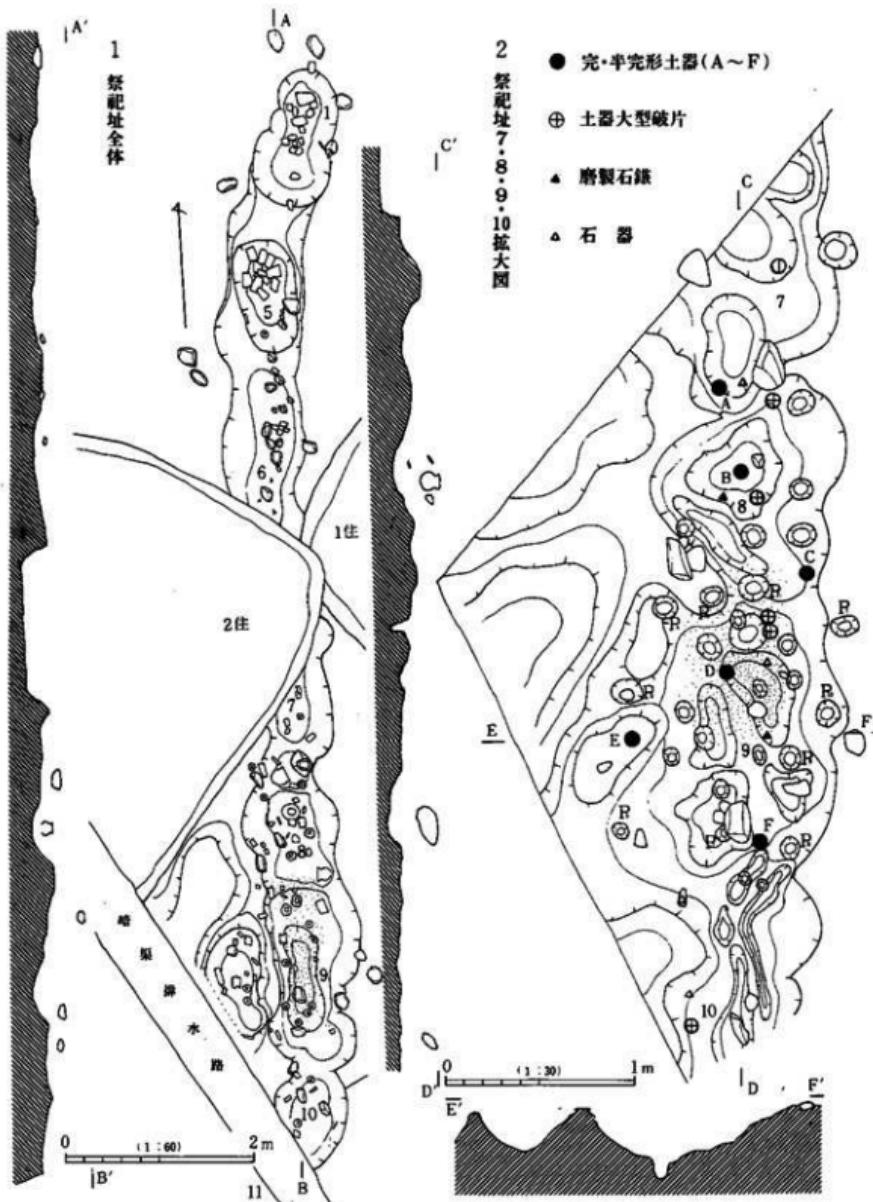
5号住居址の西側にある住居址であるが最後になって5号住居址の落ち込みとやや方向が異なるために別の住居址と区別したので遺物が選別されていない。

#### (12) 祭祀址(土壤1・5～10)

1号住居址と2号住居址との間に南北方向に直列的に続く土壤群があった。当初は土壤列ととらえ検出を続けたが、南北に続く幅60～80cmほどの溝があってそのところどころに窪みを造り土器を配置した形跡があるので、全体を祭祀址と呼ぶことにした。中間を2号住居址で切られているので不詳のところがあるが、くぼみは7箇所あり土器群の配置が見られる。便宜的に北から土壤1・5～10と区別して説明する。

##### ① 土壤1(図2・8・15・21・25、写図8)

最北に位置し南北1.5m・幅70cm・深さ10cmのくぼみに菱形土器片が2個体検出されている。破片が積み重なるように出土していて図15の1・2で斜走短線をもつもの・無文でハケ目調整痕の残るものである。回りに人頭大の石が4個有った。粗製の石包丁形石器が1個出土している。



第8図 祭祀址(土壤1・5・6～10)

### ② 土壌5（図2・8・15・21・25、写図8）

土壌1の南に南北1.2m・幅60cm・深さ8cmの窪みに壺形・壺形土器が2個体分（図15の4～6・図21の7～9）が積み重なり、磨製石包丁形石器・打製石包丁形石器（図25の11・12）が出土している。東側に拳大の石が1個あった。

### ③ 土壌6（図2・8・21、写図8）

土壌5の南に南北1.5m以上・幅85cm・深さ12cmほどの窪みに拳大の石10個と土器片数片が出土している。図21の9～12で2本の波状文・無文で表裏にハケ目調整痕を持つものである。まとまった土器の出土はなかったが住居址検出当初から土器片の出土の多かった一帯である。

### ④ 土壌7（図2・8・15・21・25、写図8・9・10・14・15）

2号住居址の南側2号住居址に一部切られる土壌で、南北1.7m・幅70cmのもので壺形土器完形・半完形（図15の8・9）のほか底部・土器片が出土している。浅い掘り込みが2箇所あり南側の掘り込みから図15の8が横倒しに検出されている。東側に平状の石を配し土器底部・土器片の出土が多い。土壌8の壺形土器と同系列のものかもしれない。土壌7～11にかけての一帯を2の図に拡大してあるが、1の図の測量のあと細かい検出をしてから2の図を測量したもので、掘り込み・ピット等が追加されているので様相が変わっている。

### ⑤ 土壌8（図2・8・15・16・25、写図8・9・10・14・15）

土壌7の南に接し土壌9に密着するように深さ15cmほどの掘り込みがある。図15の壺形土器を埋めこんだ穴・西南に細長い穴があり、完形壺形土器（底部欠損）のほかに壺形土器半完形（図16の1・2）・台付壺形土器（図16の3）等が出土している。壺形土器は直立で埋められ中から炭化米4粒が発見されている。近くからやや長めの磨製石鐵（図25の8）、土器底部・土器片が多く出土している。2の図の●印は完形・半完形土器、○印は大型土器片、▲印は磨製石鐵、△印は石器の出土位置を示す。●印A・B・Cは図15の8・7、図16の2で完形・半完形の土器はこの一帯に集中している。東側と土壌9寄りにいくつかのピットが並び南側にわずかに焼土がある。

### ⑥ 土壌9（図2・8・16・21・25、写図8）

土壌8の南に接して南北2.5m・幅1.5m・深さ10～15cmほどの幅広い落ち込みがあり、中に4か所ほどの浅い掘り込みがある。北側に焼土が広く充満し半完形土器（図16の1）・大型土器片・土器底部・土器片・有肩扁状形石器・磨製石鐵（図25の14・9）が出土している。この焼土を取り巻くように径10cm内外・深さ5～10cmのピットが25個ほどあって、P<sub>1</sub>～P<sub>20</sub>を抽出すると土壌9を取り巻く位置にある。西側にはやや小高い面があって壺形土器E（図16の9）や土器

片・石器が出土している。この小高い面は近代暗渠排水路によって切れているのでその西の様子が分からぬが、この面を含めて焼土・ピット群を持つ土壤9が祭祀址の中心かと思われる。

#### ⑦ 土壤10（図2・8・16）

土壤9の南に続く掘り込みで帯状に続く細長い掘り込みがあり、土器底部・土器片が出土している。土壤10は暗渠排水路に切られ水路を越した西にも続き、その南に土壤11があり、台付き壇の台・壺形土器口縁が出土している。

### (13) その他の土壤

#### ① 土壤2（図2）

1号住居址の南にあり長径1.2m・短径70cm・深さ20cmほどの土壤で小土器片がわずかに出土している。

#### ② 土壤3（図2・図25、写図7・15）

土壤2の南にあり径80cm・深さ20cmほどで拳大の石が詰まっていた。石の間に太形蛤刃形石器（図25の15・16）が挿入されていた。

#### ③ 土壤4（図2・21）

1号住居址に北にあって径50cm・深さ15cmほどの土壤で高環形土器口縁・壺形土器片（図21の4～6）が出土している。6は朱彩のものである。

### (14) ピット群（図2・14）

1号住居址と6号住居址の間にあり口径25cm～13cm・深さ10～20cmほどのピットが35個以上不規則に固まっていた。伴出の遺物ははっきりしないが周辺から弥生時代後期の土器片は出ている。倉庫などの柱穴群であろう。

### (15) 溝状造構1・2（図2・7・25）

グリットQ11から南へ続くもの、M12から東へ分かれるものがあった。5号住居址を切る溝址2である。溝状造構でも弥生時代の石器が出土している。

調査期間の都合で全部を検出してないが、弥生時代の溝かと思われる。

## IV. 調査のまとめ

### 1. 丹保遺跡の立地と集落

調査結果でも触れたように今回の調査地は丹保遺跡の西南端に位置し、西側に用水路の通る低地に面する小高い台地端にあって、水田耕作を営む弥生時代の集落立地上最適の場所のように思われる。近世以降何回かに亘って水田造成が行なわれているので低地と台地端の原地形は大きく変容しているであろうことと、調査地もまた水田造成により西側に土が押し出されていること、西側低地で古墳時代・弥生時代の遺物収集もできることからさらに低いところに居住地があるかとも思われるが、低地に面する台地の先端近くに立地することは間違いない。

丹保遺跡は丹保地籍のはば中央に位置し国道153号線際から南東町道堂垣外線まで320m・幅120~200mほどの範囲に亘る大きな遺跡で、弥生時代から古墳・奈良・平安時代、中世の濃密遺跡と推定されているが、今まで発掘調査例がなく実態は不詳であった。しかし古くから遺物出土は多く、とくに今回の調査地に近い中島地籍の田平氏宅前や国道に近い竹内氏宅前からは弥生時代後期の壺形土器や石器が多く出土し注目されていた。それぞれの時期の集落が何処に形成されているかははっきりしないが、大きな集落が存在するであろうことは予想され今回の調査によりその一端が検出されている。

今回の1176番地内の調査により弥生時代の住居址が10軒検出されたが、出土遺物・住居の形態方向から推定すると中期後葉2軒、後期中葉座光寺原式2~3軒、後期後葉中島式5軒に分類され、中島式のものもまた2時期に別れそうである。祭祀址と呼称する祭器をもつ土壤列は座光寺原式の時代で、柱穴群は中島式に並行するものと思われる。溝址1・2からも弥生時代後期の遺物が出土していることから弥生時代に比定されそうではあるが、5・8・9号住居址を切っていることから最も新しい時期かと思われる。

弥生時代中期に比定される住居址は、1・3号住居址で調査地の北東側に位置している。3号住居址は規模も小さく遺物出土が少ないと付属的な建物とすれば、集落の中心は北・東にあるものと思われる。後期座光寺原式のものは4・6号住居址で9号住居址も含まれるかもしれない。住居址の主軸方向は南北やや西に傾く方向で東南部に未調査区を残したのではっきりしないが、南北方向に続く集落の一部かと思われる。祭器をもつ土壤群はほぼ南北方向に列をなし、出土遺物からみても集落の西端に位置するものであろう。中島式に比定される住居址は2・7・5・8・10号住居址と思われるが、2号住居址を除けばそれぞれ一部しか検出されただけで、2号住居址も炉が検出されていないので考察に事欠く状況である。それぞれの住居址の方向から推定すると、北西から南東方向に並ぶ集落構成かと思われる。この方向は西側に位置する低地の方

向にはば一致することに興味が持たれる。

今回の調査地内でみる限りでは同一地域にそれぞれの集落が重複しているようであるが、他地区の発掘調査例によると僅かずつ所を変えて集落が形成されることもあることから、或はと思うが調査範囲が狭く北東側に密集する状況で結論付ける資料は無い。

## 2. 祭祀址の考察

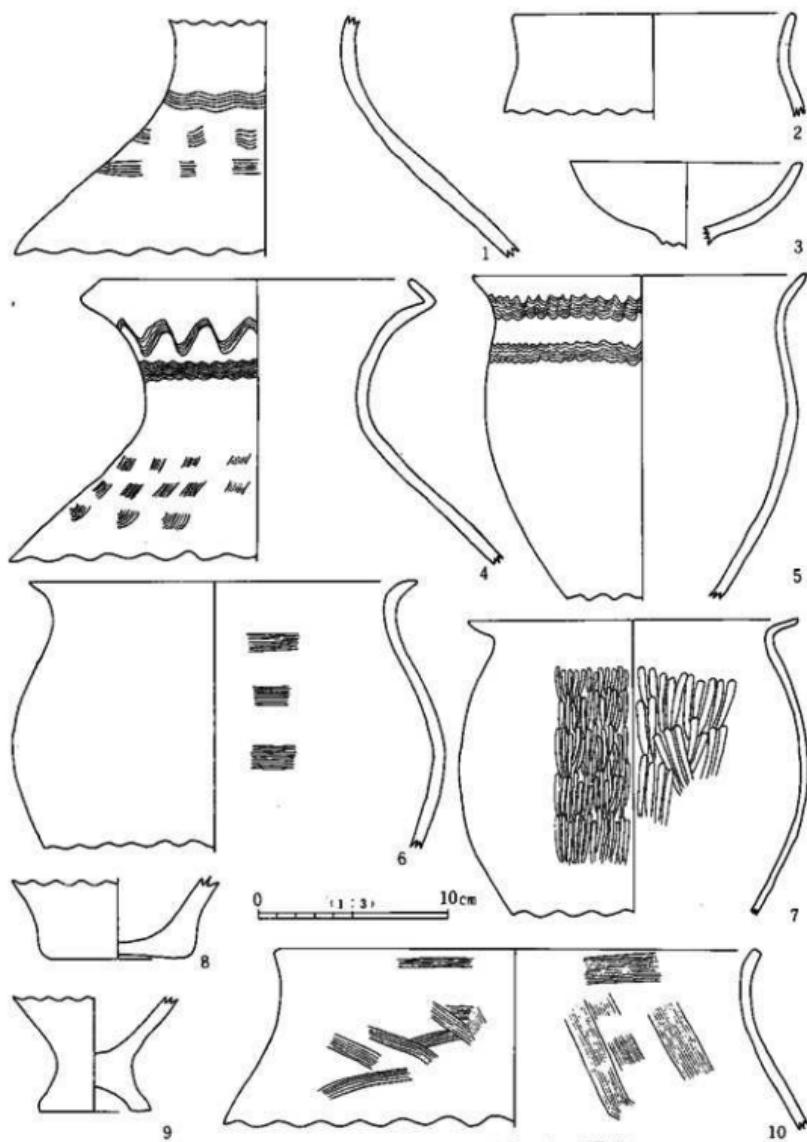
祭祀址と推定される遺構が検出された例は下伊那地方でも何か所があるが、最も代表的な祭祀群が検出された例は飯田市鼎天伯B・松尾清水遺跡である。しかし共に古墳時代のもので弥生時代のものは見当たらない。発見された土器群全部を祭祀と決め付ける資料に事欠く状況ではあるが、2軒の住居址の西側に並行して土壙群が並ぶこと、土壙とはいっても遺体埋葬を目的とするような深さを持たないこと、祭祀とみられる特定な土器はないが炭化米を入れた壺形土器をはじめ壺形・壺形土器を直立させた形跡があること、壊れた土器片とともに土器底部の数が多いこと、土壙8・9を中心にして相当量の焼土があったことから祭祀址と規定したものである。

8図にみられるように約12mに亘り浅い溝状の凹地が掘られ、所々掘り下げて壺形・壺形土器を1~2個体配置している。途中2号住居址に切られているため不詳なところがあるが、7~10一帯が中心でそのなかで9が主体になる。7の南から10の北側にかけて遺物出土が多く完形・半完形土器も多い。Aは壺形土器完形、Bは壺形土器で器内に4粒の炭化米が入っていた。上面が破壊されていたので土器片の散乱が目立ち、大型土器片や土器底部が多く相当量の土器が置かれたようである。石器の量はさほど多くないが磨製石鎌(完形品)が2件出土している。9を中心にして浅い壙内から周辺には焼土が多く、土器片の出土も多かったのでここが祭祀址の主体部と思われる。土壙9の周辺には多くのピットがあり、9を取り巻くように穿たれていることから何らかの簡単な構造物があったものと推定される。西側には小高いところがあって壺形土器・土器片の出土が多く祭壇的なもののが有ったように思われるが、近代の暗渠排水路で破壊されて詳細は不詳である。

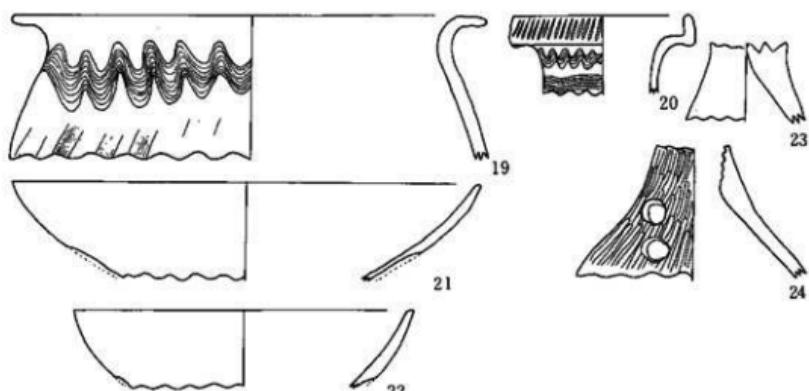
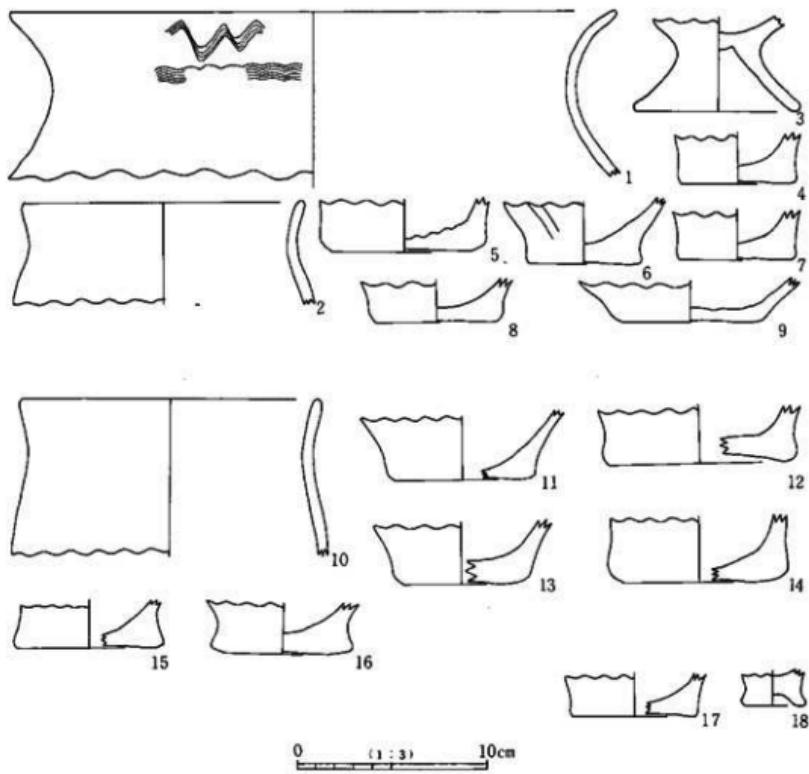
何れにしても広範囲に亘る調査が成されていないので確実に祭祀址と規定する条件が不足はしているが、2軒の住居址との位置関係・土器群の並び方・焼土とピットのあり方・西の低地に向く位置・方向等から田の神を祭る遺構のひとつと推測することはあながち不自然ではないと思われる。

整理・考察をまとめてみると未調査箇所の多かったことが悔やまれるが、民間の方のご協力による無理した調査であったこと、生憎出水・浸水の多い時期で排水に多くの労力を費やす障害もあって止むを得ないことではあった。不十分とはいえ丹保遺跡の一郭で遺跡性格の一端に触れることができたことは幸いと思っている。

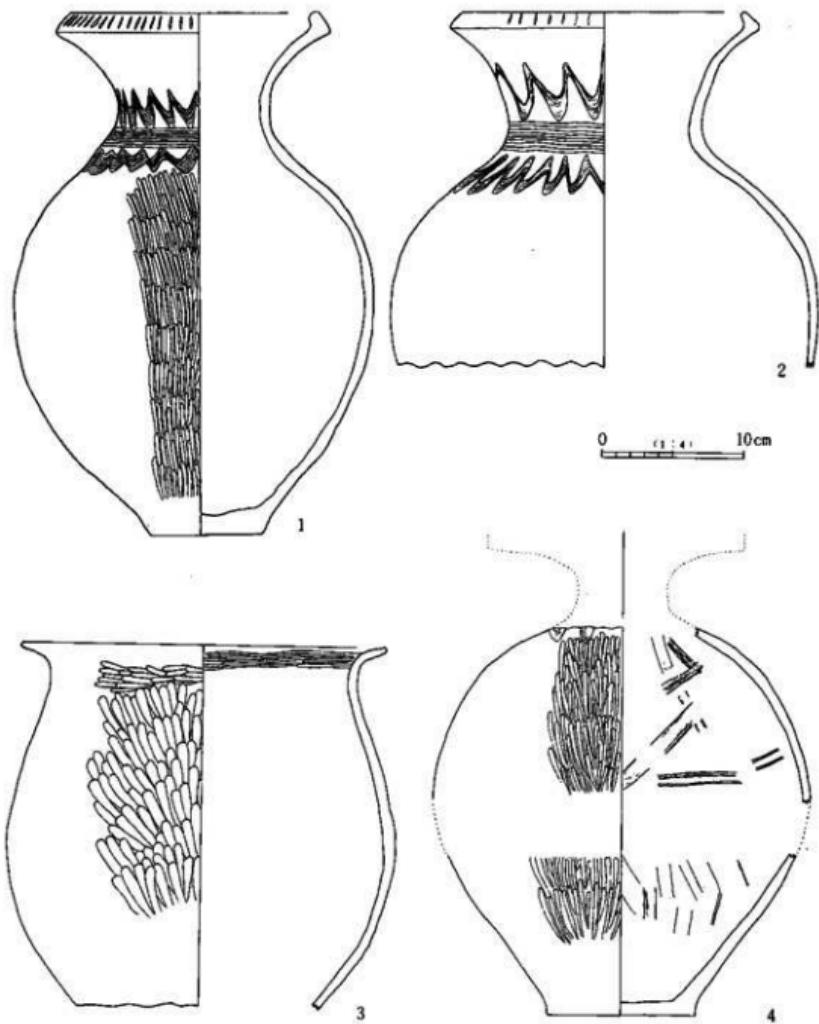




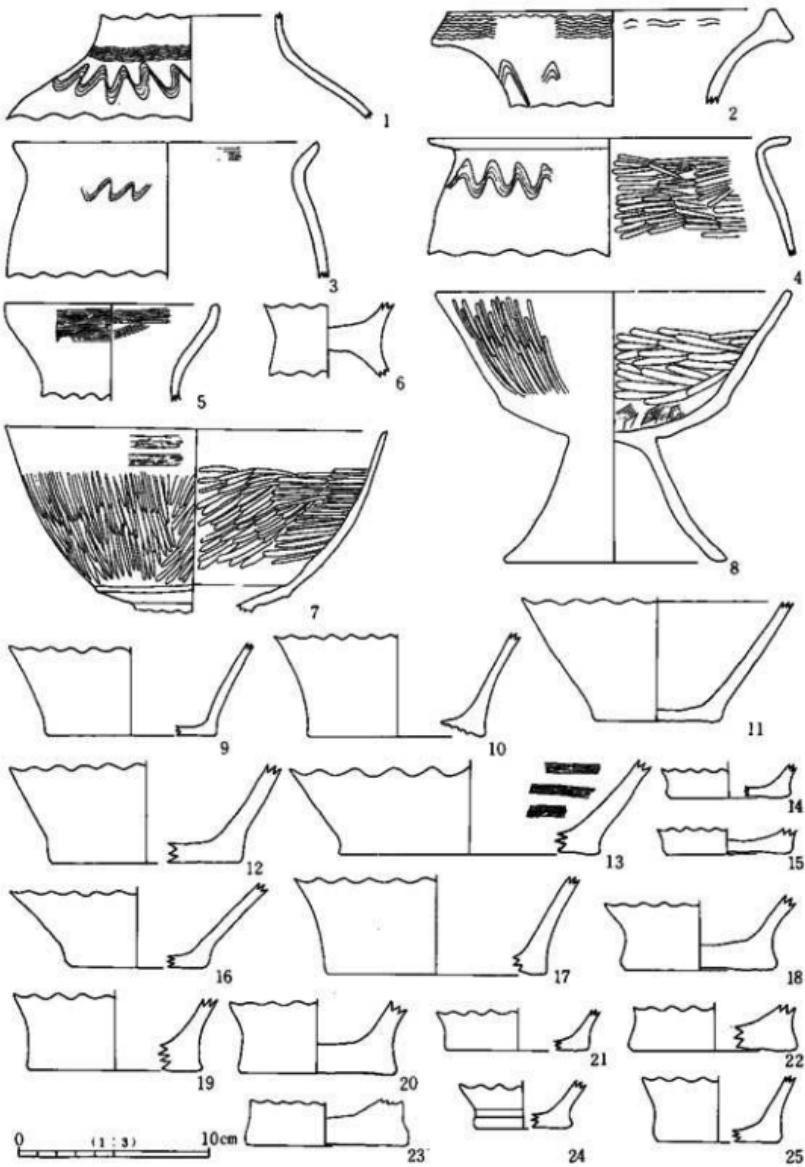
第9図 1・4号住居址出土土器 (1~3 1号住)  
(4~10 4号住)



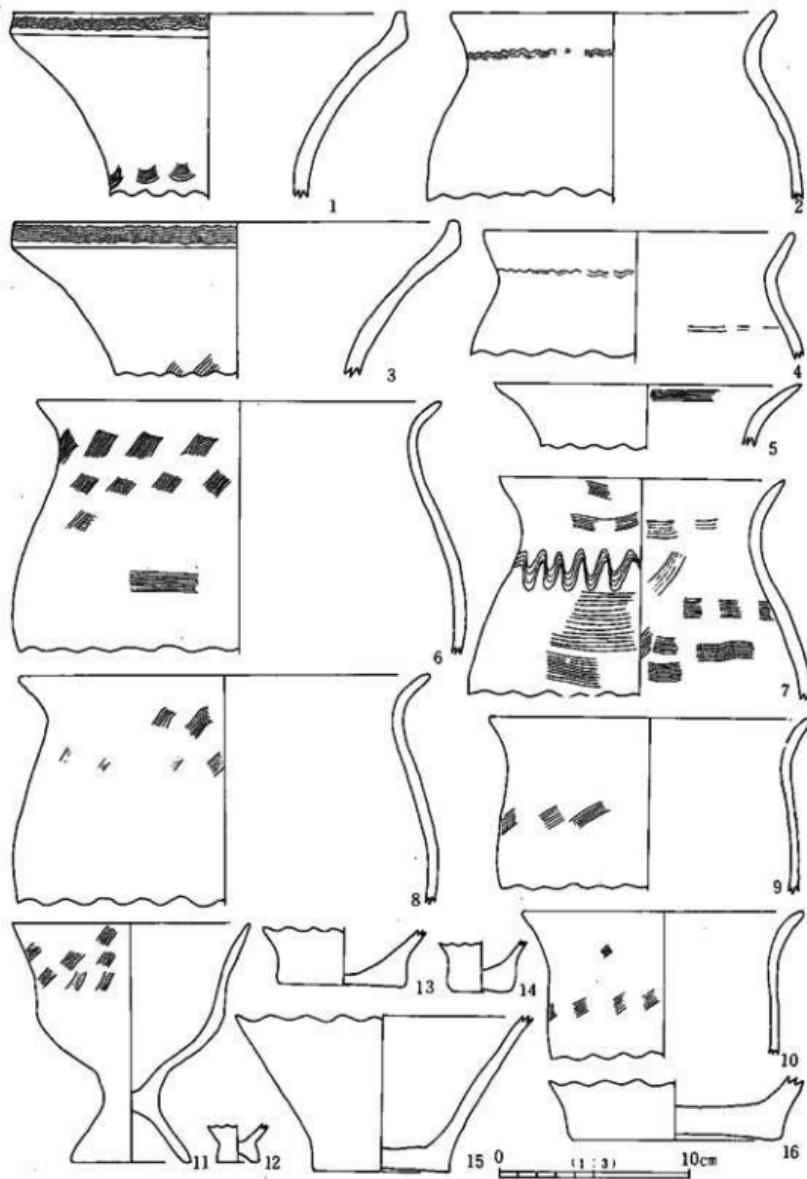
第10図 1・4・5号住居址出土土器 (1~9 1号住居址, 10~18 4号住居址)  
(19~22 5号住居址)



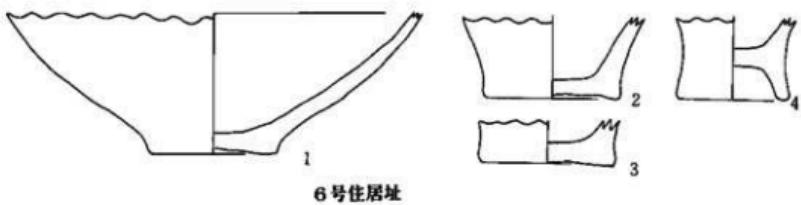
第11図 2号住居址出土土器(1) (1:4)



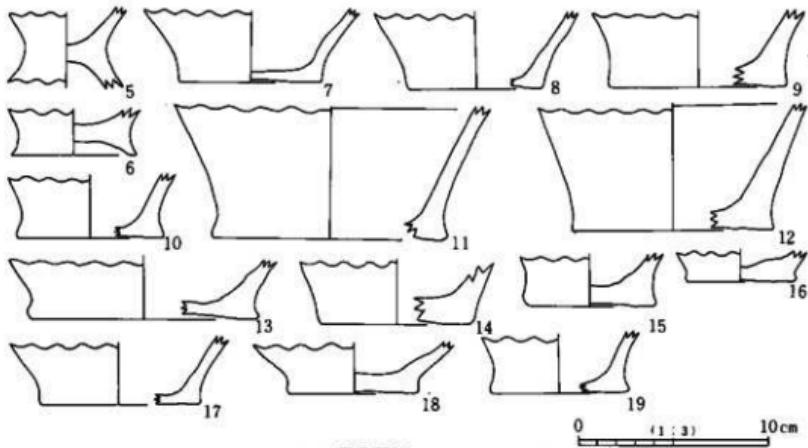
第12図 2号住居址出土土器(2)



第13図 6号住居址出土土器(1)



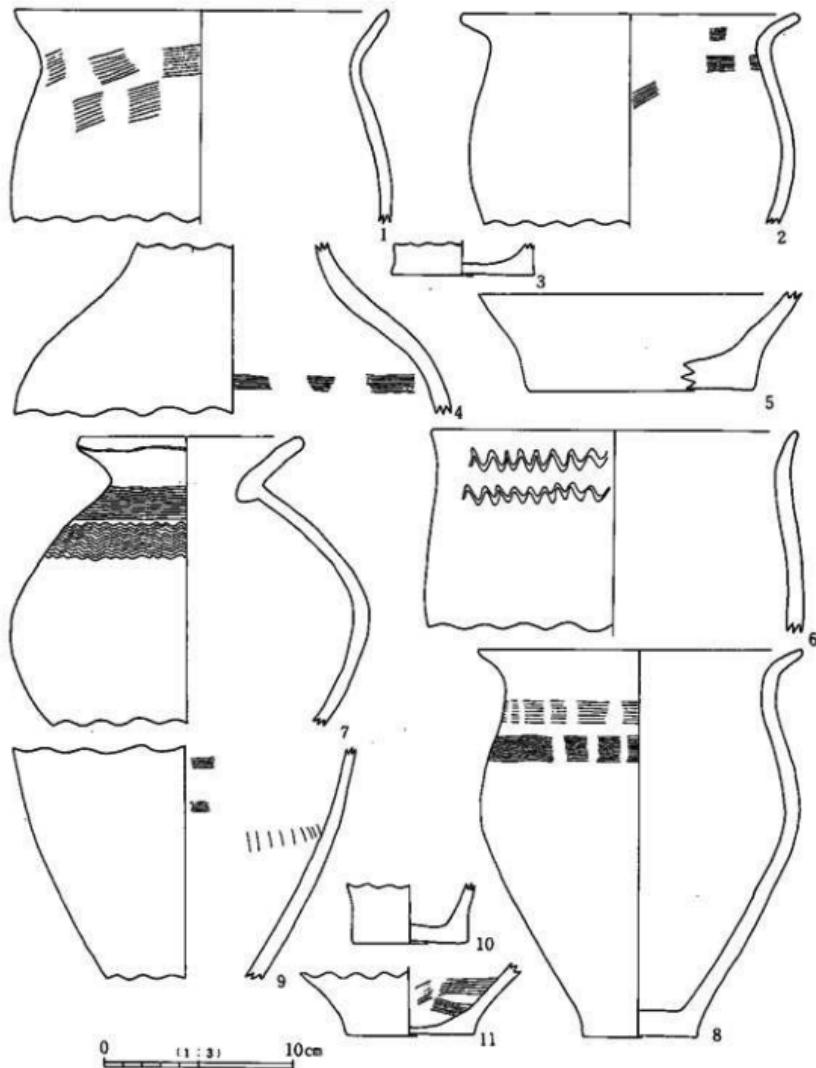
6号住居址



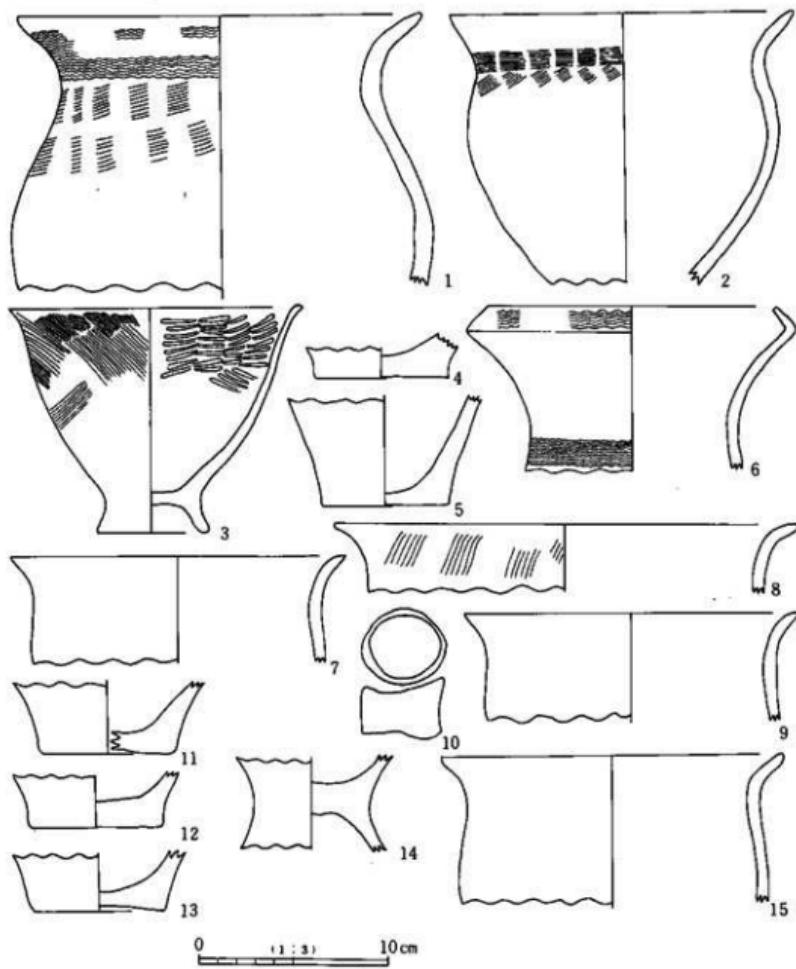
5・8号住居址



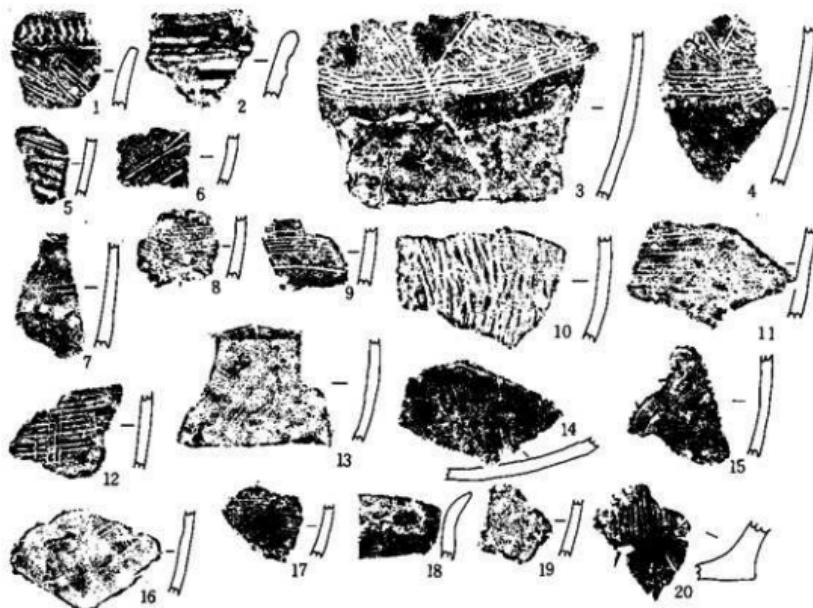
第14図 6・5・8号住居址出土土器、柱穴群 (1~4 6号住, 5~16 5・8号住)



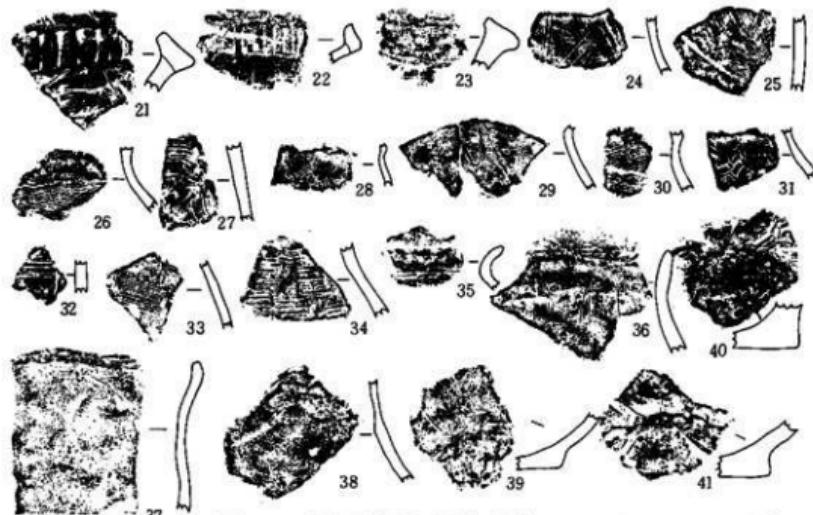
第15図 祭祀址中央～北出土土器



第16図 祭祀址中央～南出土土器 (F 8～11)



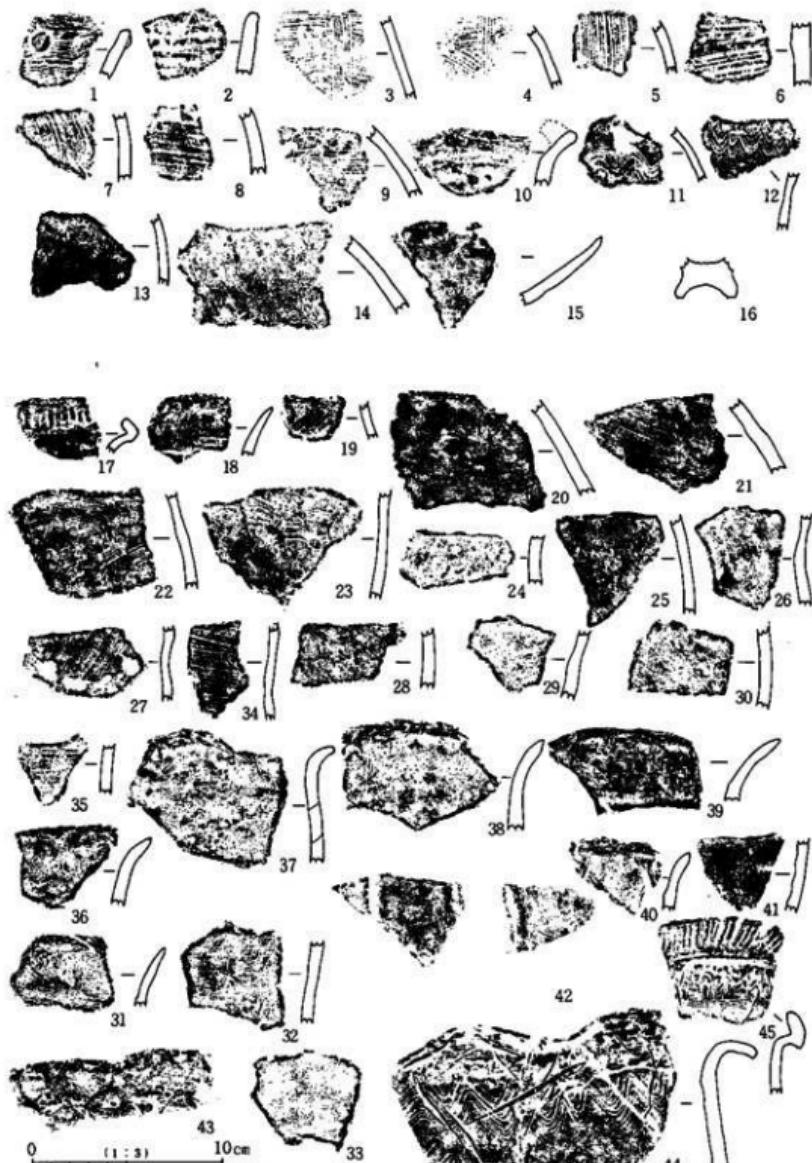
0 (1 : 3) 10cm



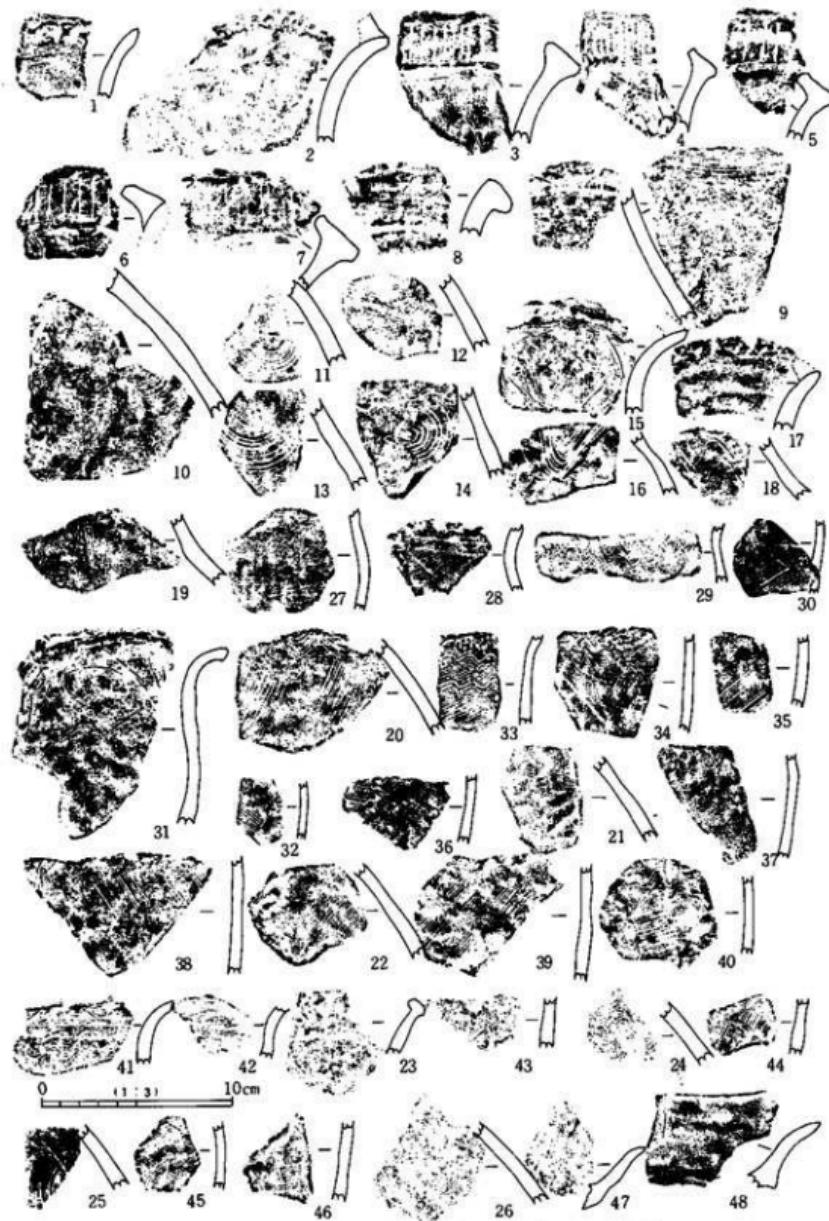
第17図 1・4号住居址出土土器拓影 (1~20 1住, 21~41 4住)



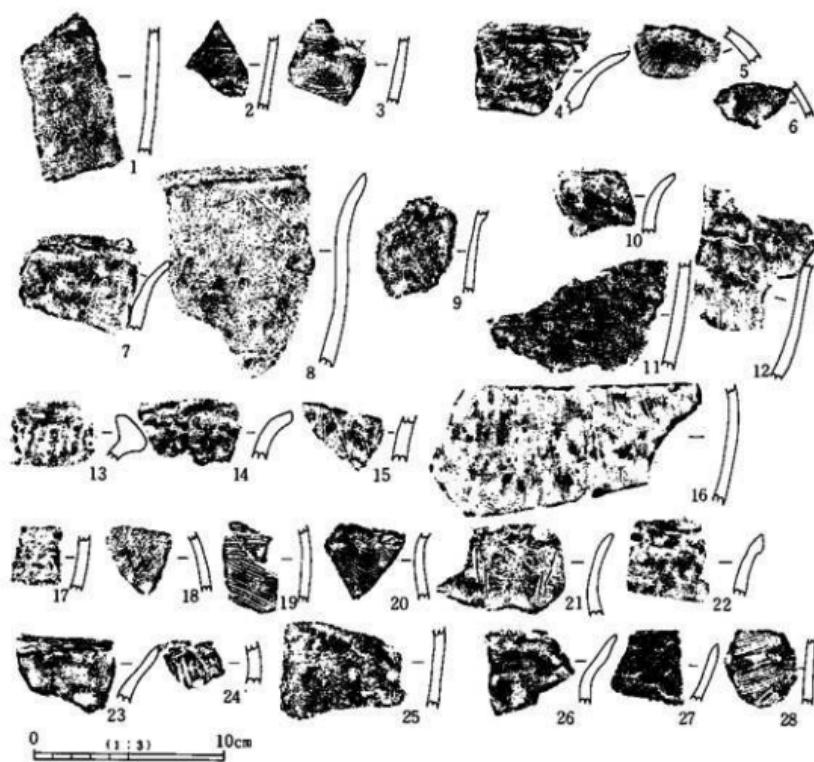
第18図 2号住居址出土土器拓影



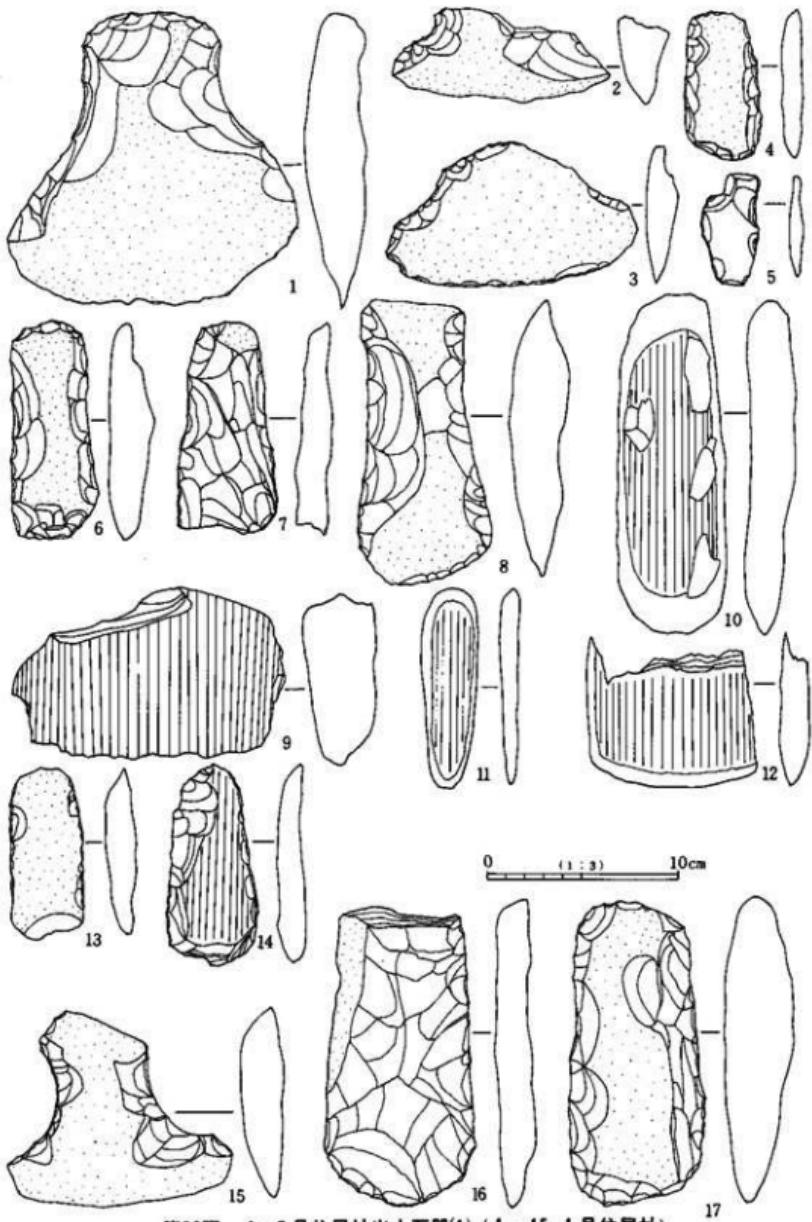
第19図 3・5・6号住居址出土土器拓影 (1~16 3号住, 17~43 6号住)  
(44~45 5号住)



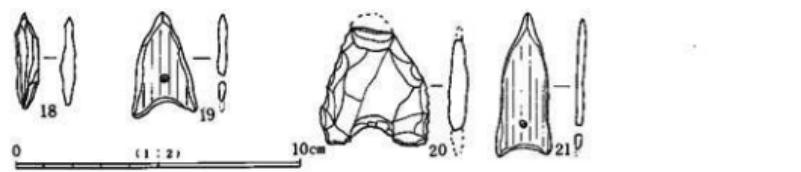
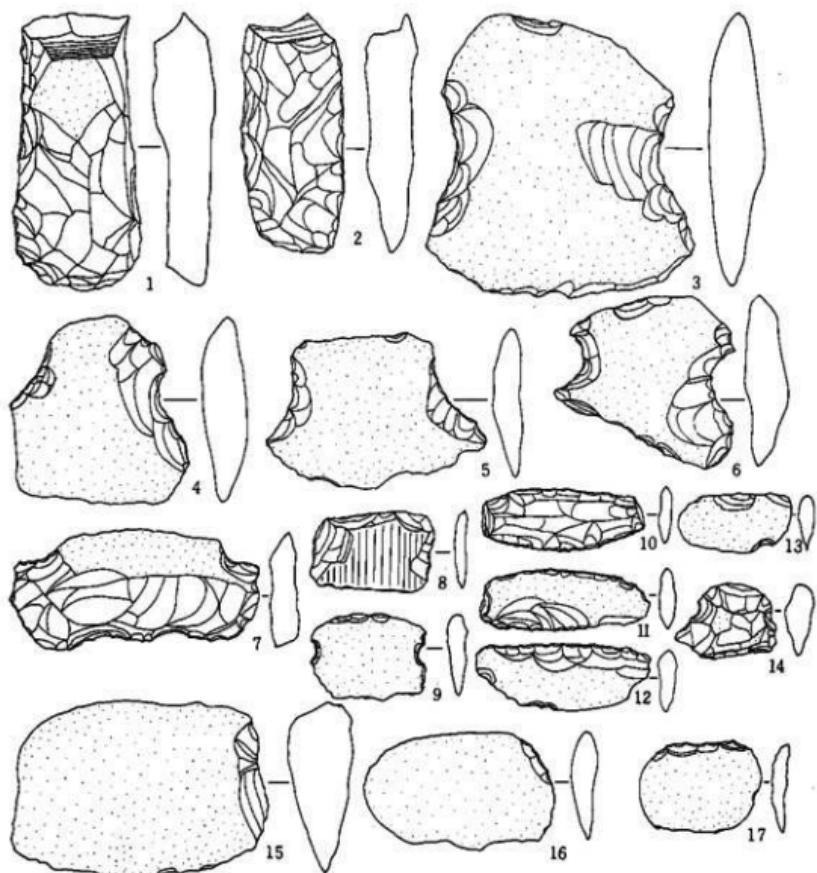
第20図 5号住居址出土土器拓影 (1部 8号住居址)



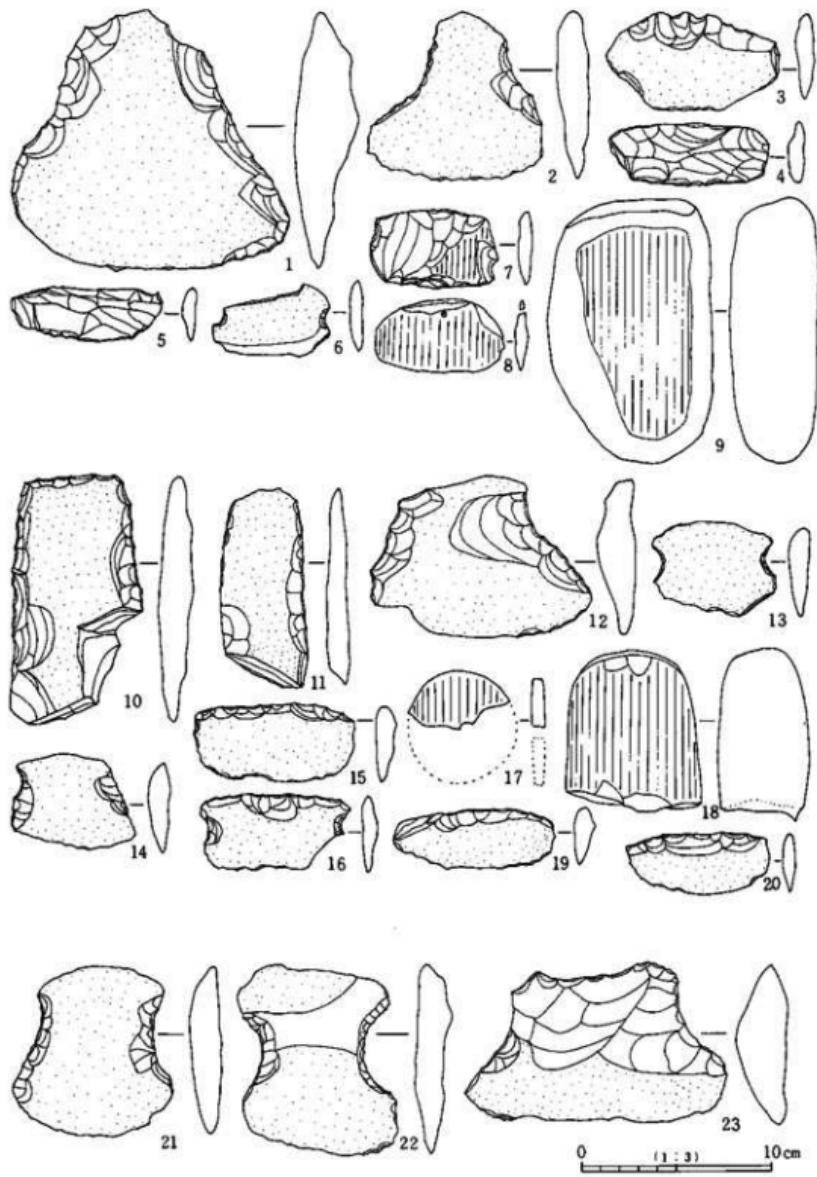
第21図 祭祀址出土土器拓影 (1~3 F1, 4~6 F4, 7~8 F5)  
 (9~16 F7~8, 17~28 F9~10)



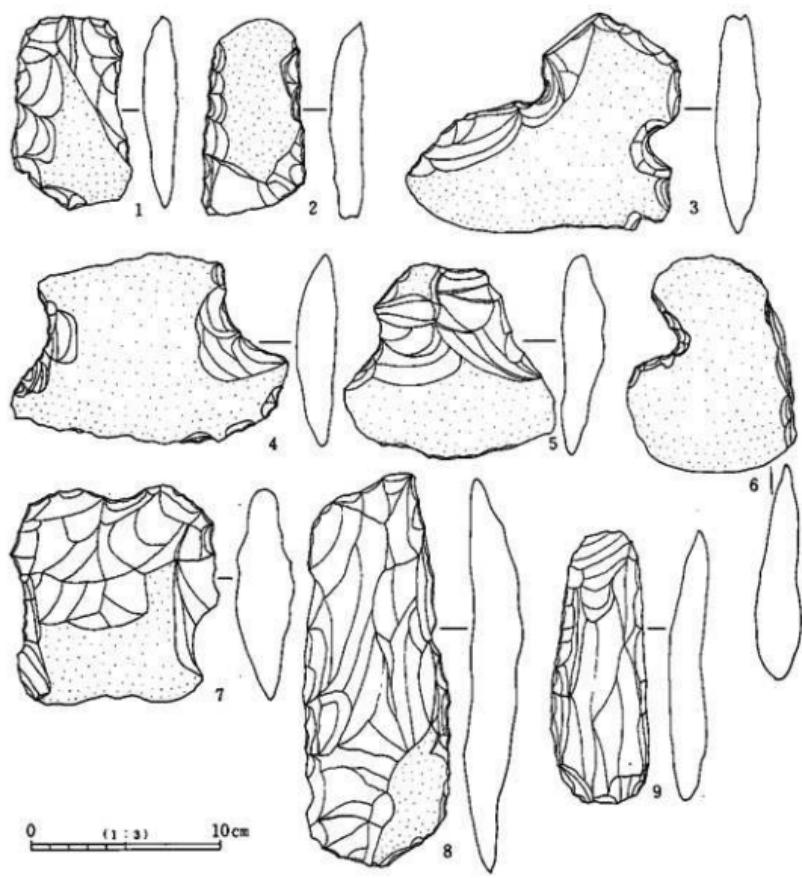
第22図 1・2号住居址出土石器(1) (1~15 1号住居址)  
(16~17 2号住居址)



第23図 1・2・3号住居址出土石器(2) (1~17・20 2号住)  
 (18・19 1号住)  
 (21 3号住)

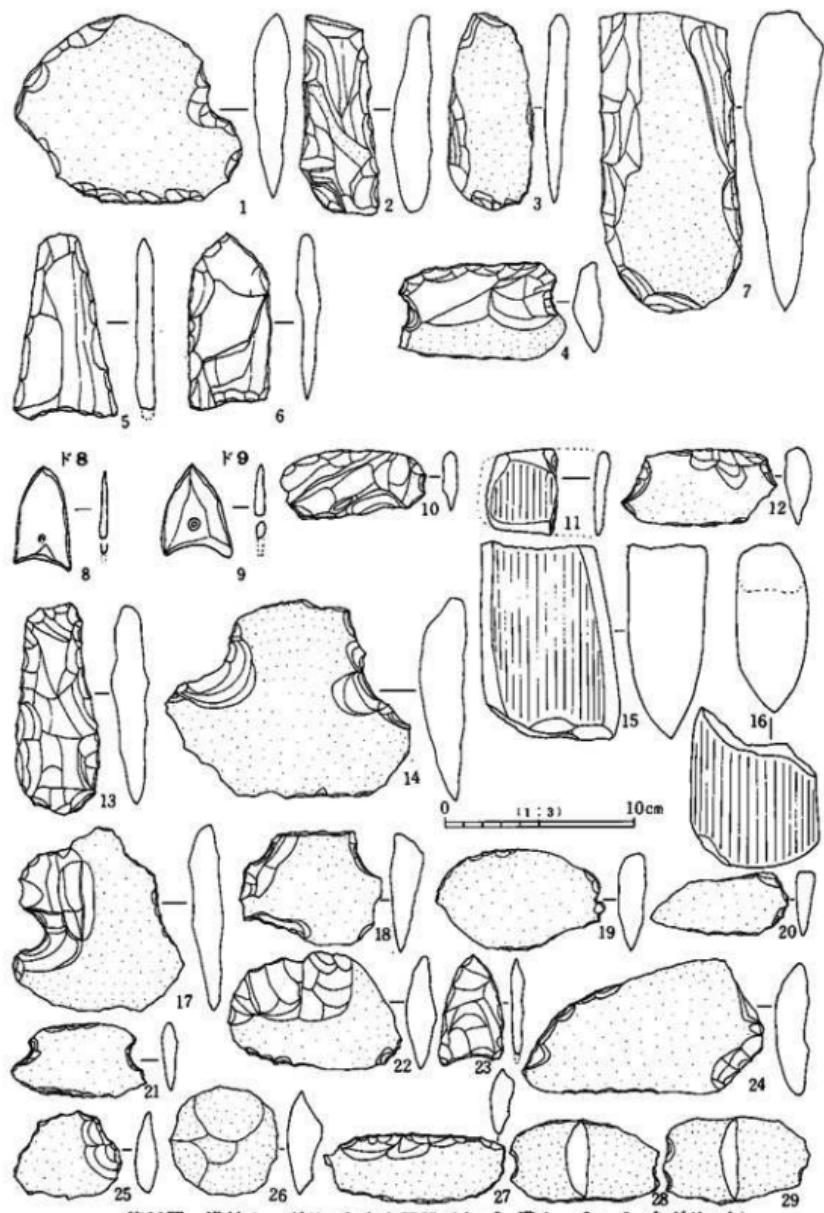


第24図 4・5・6号住居址出土石器 (1~9 1号住, 10~20 5号住)  
(21~23 6号住)



第25図 6・8号住、祭祀址、溝址等出土石器

(1~6 1号住, 7・8号住, 8~14 祭祀址  
 (15~16 土壌, 17~24・26 溝1, 21~その他)



第26図 溝址1、グリット出土石器 (1・2 溝1, 3~9 名グリット)  
 $(8 \cdot 9 (1 : 2))$

写図一 発掘調査前の調査地



1. 西低地からみた調査地（白い車のある所）



2. 調査開始 教育長あいさつ

写図2

遺構全景



1. 南から(中央 3・6号住居址)



2. 北から(手前 1・4号住居址)

写図3  
1・4号住居址



1. 1・4号住居址の重複



2. 4号住居址の埋壺

写図4  
2号住居址



1. 下層



2. 上層 炭と遺物出土状況

写図5  
2号住居址・祭祀址土器出土状況



1. 壺形土器 1・2・3 出土状況（2号住）



2. 祭祀址南 土器出土状況

写図 6  
6号住居址と柱穴群



1. 6号住居址全景



2. 6号住居址北側と柱穴群

写図7  
3号住居址と石組土壤



1. 3号住居址

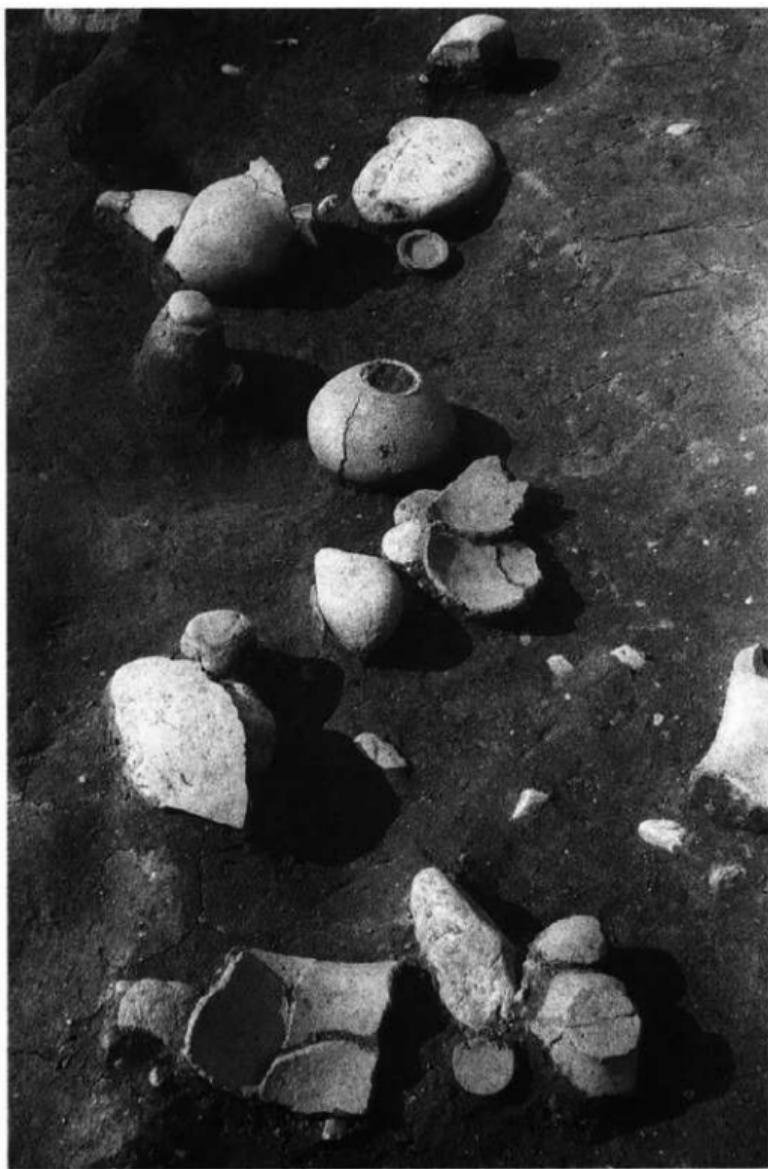


2. 石組土壤（太形蛤刃石器が見える）

写図8 祭祀址全景（手前土壤9）



写図9 祭祀址・祭器出土状況（上塙7・8）



写図10 祭祀址 甕形・壺形土器出土状況

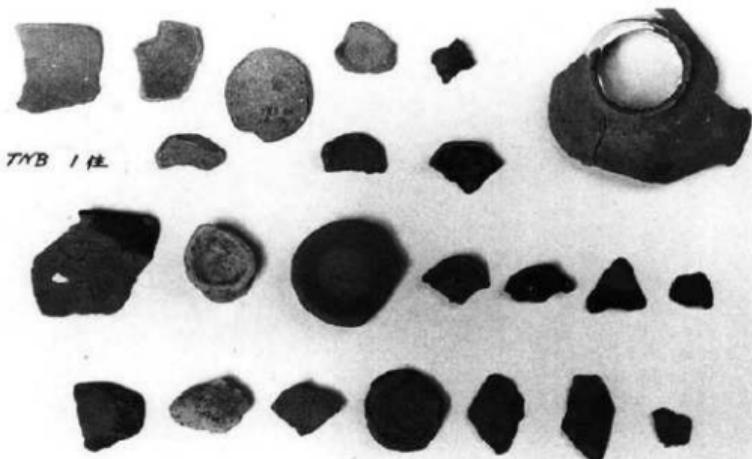


写図11  
1・4号住居址出土土器



TNB 1住

1. 1号住居址



2. 上 1号住居址、下 4号住居址



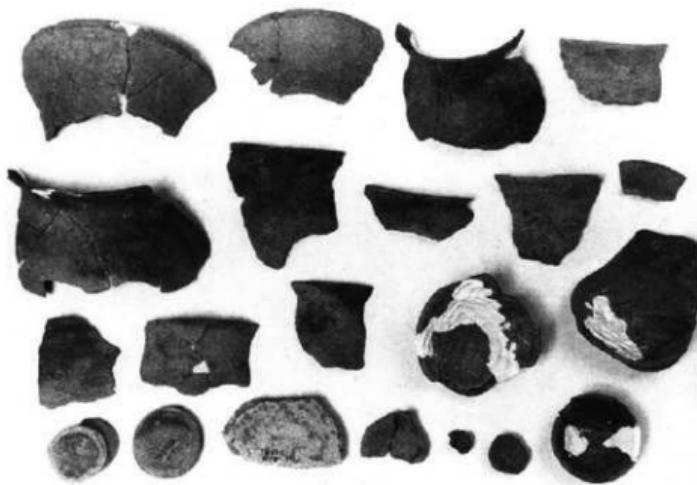
3. 4号住居址

写図12

2号住居址出土土器



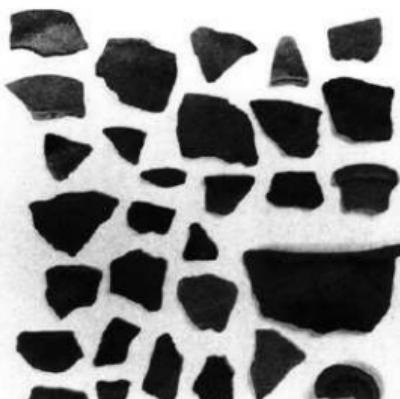
写図13  
3・5・6号住居址出土土器



TNB 6住



TNB 3住

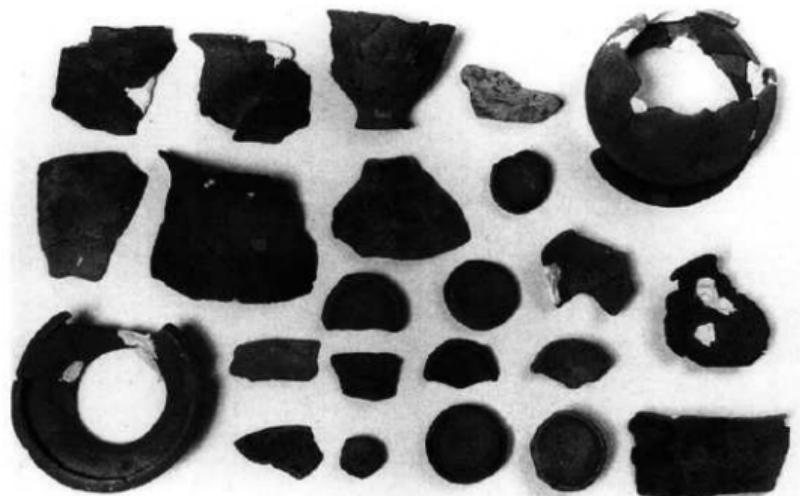


TNB 6住

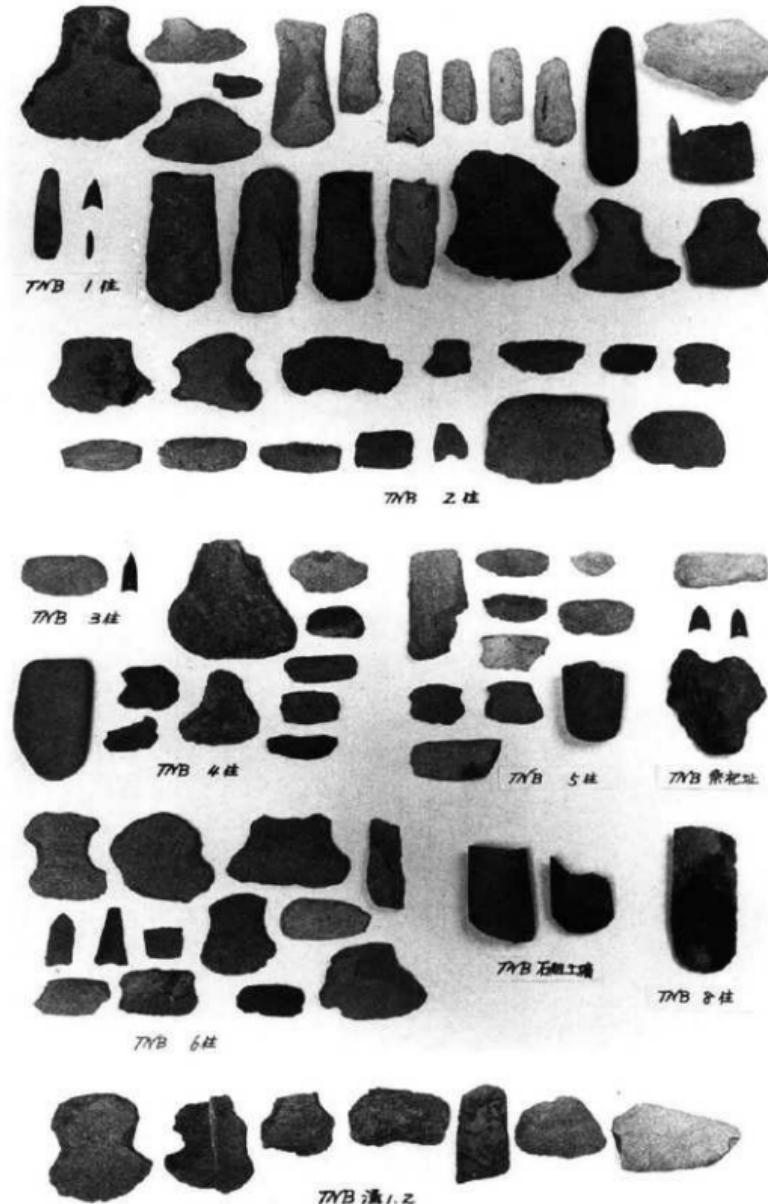


TNB 5住

写図14 祭祀址出土土器と炭化米（スケール単位mm）



写図15  
出土石器



写図16 調査団と調査風景



---

---

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第18集  
丹保遺跡  
—上郷町飯沼丹保地区宅地造成  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成元年3月30日 発行

編集・発行／長野県下伊那郡上郷町教育委員会  
長野県下伊那郡上郷町飯沼3092  
印刷／飯田共同印刷株式会社  
長野県下伊那郡上郷町黒田248-1

---

---

